

# 岐阜県立関高等学校地域研究部報告

## 第4号

### 特集： 歴史遺産とまちづくり

- ・「関鍛冶を世界へ！プロジェクト」 探究活動の成果を生かしたまちづくりの構想  
那須優花 小林未紗 岩井萌々子 赤羽葉那 吉川奎騎 山下和真 酒井雄万  
..... 2
- ・ 応永年間、関鍛冶に何が起きたのか 関鍛冶成立期に関する探究  
那須優花 小林未紗 岩井萌々子 赤羽葉那 山内康誠 藤井大輝  
小山政亮 田中莉子 藤村彩須果 小原和也 河路康太 渡邊貴太  
..... 10
- ・「織田信長の東美濃攻略戦」とまちづくり  
田中莉子 藤村彩須果 ..... 22
- ・ 明智光秀の謎の前半生を追う 史料とフィールドワークからの検証  
藤井大輝 山内康誠 小山政亮 ..... 31
- ・ 明智光秀と関市のつながりを追って  
藤井大輝 山内康誠 小山政亮 ..... 42
- ・【特別寄稿】  
ナショナル・アイデンティティとサブナショナル・アイデンティティ ウズベキス  
タンの事例  
佐藤 太一（東京大学教養学部国際関係論コース在籍） ..... 47
- ・ 後 記

2021年3月16日



# 「関鍛冶を世界へ！プロジェクト」 探究活動の成果を生かしたまちづくりの構想

那須優花 小林未紗 岩井萌々子 赤羽葉那 吉川奎騎 山下和真 酒井雄万

## はじめに ～SGH・FRH と地域研究部の活動～

岐阜県立関高等学校は 2014 年度から、岐阜県スーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定され、「総合的な探究の時間」（旧称：総合的な学習の時間）を使って「課題解決型研究」に取り組んできた。1 年生は「SDGs とまちづくり」、2 年生は「SDGs の実現に向けて」をテーマにし、一年を通してグループ活動を行っている。

さらにこれに連動して、地域研究部、自然科学部、文芸部、家庭クラブ、保健委員会などの部活動や委員会、有志グループが、それぞれの立場からより深い「課題解決型研究」をめざし活動を続けている。

本年度よりは FRH（地域共創フラッグシップハイスクール）へと指定が変更され、SGH のコンセプトを継承しつつも、国連の掲げる「持続可能な開発目標」（SDGs）の実現を共通テーマに掲げ、地域との連携を深めた活動を実践している。

今回私たちが取り上げる具体的なテーマは、SDGs の 17 のアイコンのうちの 11 番目に位置付けられる「住み続けられるまちづくりを」（都市と人間の居住地を包摂的、安全、強靱かつ持続可能にする）である（右図）。このアイコンのサブテーマのひとつには、「世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化する」ということが掲げられている。



地域の文化遺産や自然遺産の保護・保全が、持続可能なまちづくりのための基礎的条件であることは、国連の認めるところである。2018 年以降、私たち地域研究部も岐阜県博物館や図書館、関市や富加町、飛騨市と連携した歴史探究を進めるとともに、講演会や展示等、学びの成果を地域に還元できるような企画を積み重ねてきた。

ささやかではあるが、SDGs 実現に向けての努力の一環としての実践でもあり、部活動の方針として今後も継続していこうと考えている。

## 1) せきの未来・社会貢献プロジェクト

地域研究部では、関市役所や関市観光協会と協力しながら、市内各所の史跡調査を継続的に行っている。調査では、市内に残る明智光秀の伝承についての調査や、富野地区にある禅宗寺院・古社の調査などを通し、様々なことを驚きとともに知ることができた（右写真、富野地区・上大野神社）。

このような貴重な体験をより多くの方々と共有できる機会を増やし、さらには地域の活性化につなげることができないか。そう考えた私たちは、関市の企画する「せきの未来・社会貢献プロ





プロジェクト」への参加を考えるようになった。

2017年度から始まったこの新たなプロジェクト（通称：みらプロ）」は、「企業と非営利団体が協働し、社会貢献とビジネスの両立を図る」ことを目的としている。

すでに関高校では、「農地保全と地産地消をめざす米粉普及プロジェクト」「特産品キウイの焼肉たれプロジェクト」「関の刃物の海外普及プロジェクト」など、地域を活性化するための様々な活動を行っている。

そのような地域貢献を、私たち地域研究部で行っている歴史探究に繋げることはできないか。検討した結果、以下に掲げる「関鍛冶を世界へ！プロジェクト」を、関市商工課に提案した。

## 2) 「関鍛冶を世界へ！プロジェクト」の誕生

私たちは昨年度より刀剣産業の歴史の研究を続けている。刃物の生産地として知られる関市では、15～16世紀の鍛冶工房址の古町遺跡や（上写真）、室町～近世初期の鍛冶屋敷址の重竹遺跡が調査されている。

また、関市では今も様々な職人さんたちが刀剣に関する伝統の技を継承している。私たちは職人仕事から得られる民族誌的データと、遺跡からわかる考古学的データの比較検討によって、関の刀剣文化をとらえなおすために、職人仕事を直で見学し調査を重ねた。いわゆる Ethno archaeology（民族考古学）や文化人類学を意識した手法であり、研究にあたっては、後述する青木啓将さんの著作に大いに触発された。

聞き取りを繰り返す中で職人さんたちから「若い人が刀剣産業に関心を持ってほしい」「関の刀剣産業を若い人たちのセンスで外部に発信してほしい」ということを繰り返し聞いた。

近年の「刀剣女子ブーム」「インバウンドブーム」を単なる「ブーム」で終わらせることなく、持続性のあるものにするにはどうしたらよいか、私たちは話し合いを重ねた。その結果、「本物の良さを分かってもらうためには、実際に関に来て、関鍛冶伝承館や職人さんの工房で様々な体験をしてもらうことが一番ではないか」「多様なニーズに応えるために、多様な体験プログラムを用意することが必要なのではないか」と考えるにいたった。

幸いなことに、このような考えに共鳴してくださる職人さんに出会うことができた。刀匠の吉田研さんである。吉田さんは関市の隣町・加茂郡富加町在住で、私たちにとっては高校の大先輩にあたる方だ。そのためか、初対面から打ち解け、刀剣文化の初歩からひとつひとつ丁寧に教えてくださった。

吉田さんの工房では、見学者が希望すればたら製鉄や刀剣鍛錬の体験もできる。実際に、



体験を希望してやってくるインバウンドもいるとのことであった。

吉田さんとの語らいの中で、私たちはごく自然に「職人さんと高校生が一緒になって、関の刀剣産業を盛り上げることができないか」という話になった。そこから、「みらプロ」の認証を受け、関市のバックアップをお願いしてみようと話が進んだ。こうして生まれたのが「関鍛冶を世界へ！プロジェクト」である。

本年度7月28日、このプロジェクトは関市長の承認を受け、関市公認プロジェクトとして正式にスタートすることになった（**前頁写真**、左から関市長、学校長、生徒4名、吉田刀匠）。尾関市長からは「行政とは違う高校生の視点で関鍛冶を発信してほしい」と激励された。

### 3) 関鍛冶のルーツを探る学び（一）

#### ～青木啓将氏の著作との出会い～

鉄を鍛え、刀に仕上げ、磨き上げ、美しく飾る。このプロセスの基本形は今も受け継がれている。もちろん時間的経緯を重ねる中で変わった部分もあるだろうが、現在の職人仕事との比較を通じ、遺構や遺物の解釈を試みてはどうだろうか。そんな思いから、学校や市立図書館で史料を探る中で、ある一冊の本と出逢った。青木啓将著の『日本刀の生成 物質性をめぐる人類学的研究』（2019）である。刀は本来武器として誕生し、弥生時代には日本列島に伝わったとされている。著者は、武器である刀が独自の進化を経て、伝統的な芸術品や神社に奉納される神聖視の対象、すなわち、多義的な意味を持つ存在になったと述べている。

私たちは、著者の言う「多義的な意味を持つ」日本刀を、「計り知れない可能性がある」と読み替えて、その可能性の一つに地域創生を見出した。そのためには、まずは私たちが関の刀についての歴史や、その工程についての知識を身につける必要がある。そこで、職人の方々への聞き取りを基盤とする民族誌的研究として位置付け、活動してきた。

若手の人類学者である著者のテーマは、現代日本刀の製作や鑑定に携わる人々の研究であり、その舞台は私たちの関市であった。「この人に会って話を聞きたい」と思った私たちは、著者略歴を調べ、2017年、若くして亡くなられていたことを知って愕然とした。しかも母校関高校の出身。私たちの先輩である。青木さんの研究テーマは「現代日本刀」で、私たちのテーマは「関鍛冶の歴史的探究」。違いはあるものの、多方面からアプローチをするという大切な視点を著書から学び、研究活動に大いに活かすことができた。

### 4) 関鍛冶のルーツを探る学び（二）

#### ～職人工房を訪ねる～

私たちは、刀剣製作に関わる職人工房を以下の通り次々と訪ね、仕事ぶりを拝見しながらインタビューを重ねた。

**<鍛冶師（刀匠）の仕事>** 吉田研氏の工房を訪ねた（本校卒業生）。玉鋼の加熱、積み沸かし、折り返し、作り込み、素延べ作り、形成、火造り、センスキ、荒仕上げ、土置き、焼き入れにいたる刀剣鍛錬の諸工程を、道具類や原材料、半製品を実見しながら詳しく学

んだ。

また、鍛冶の前段階にあたる砂鉄精錬を、吉田研氏の指導のもと行なった（写真右上段）。貴重な体験であった。

**<研師の仕事>** 伊佐地亨氏、昌充氏（本校卒業生）の工房を訪ねた。大まかに成形された刀が、粗砥に始まり砥石片を和紙に漆付けした砥石を使って仕上げるまでの作業を経て独特の光沢や刃文を出す諸工程について学んだ（写真右中段）。

**<拵えの仕事>** 鞆師の森隆浩氏（本校卒業生）、束巻師の遠山康男氏の工房を訪ねた。樋入れ、銘切りの終わった刀身は、白銀師、鞆師、研師、塗師、柄巻師等の拵え仕事を経てようやく完成する。各工程に関わるそれぞれの職人の専門性やこだわりについても学べた。

特に、束巻師の遠山氏が、素材の鮫皮にこだわり、遠くインドネシアまで買い付けに出かける話には驚いた（写真右下段）。教科書に登場する朱印船貿易の輸入品目のリストに、鮫皮がある理由がはじめてわかった。



## 5) 探究活動からまちづくりへ

以上の職人仕事を学ぶ過程で得た知識は、前述の古町遺跡や重竹遺跡の遺構・遺物の解釈に大いに役立ったが、その具体的内容は本稿の意図するところとはことなるのでここでは割愛する。

私たちの探究は、大きく分けて、①書籍から得る文献史学の成果、②遺物や遺構をめぐる考古学の成果、③職人仕事から学ぶポルタージュ（民族誌）の3つの分野にまたがる。

どの分野の学びも貴重であったが、インパクトの点では、職人工房の訪問とインタビューが一番大きかった。あちこちの工房を訪ね、刀剣の魅力、伝統技術のすばらしさについて教えていただいたが、聞き取りを繰り返す中で、「若い人が刀剣産業に関心を持ってくれてうれしい」「関の刀剣産業を若い人たちのセンスで外部に発信してほしい」と繰り返し言われたことが印象的であった。

そうした期待に応えるためにも、私たちは刀剣に関する探究をさらに深めると同時に、その魅力を地域の活性化、たとえば産業振興や観光開発、市民のための生涯学習、地域のイメージアップにつながる情報発信などに繋げていく方法について話し合った。

近年の「刀剣女子」「インバウンド」のブームを一過性の現象に終わらせることなく、持続性のあるものにするにはどうしたらよいか。「ウィズ・コロナ」「新状態」の下、観光を



はじめとする地域経済をどのように再構築していけばよいのか。話し合いを繰り返し、結果、関の魅力はバーチャルではなくリアルの魅力や説得力にあるとの点で見解が一致した。

本物の良さを分かってもらうためには、実際に関に来て、関鍛冶伝承館や職人さんの工房で様々な体験してもらうことが一番ではないか。

多様なニーズに応えるために、多様な体験プログラムを用意することが必要なのではないか。

とはいえ、三密を避ける観光って、どうしたらよいのか。オンラインを利用する手段はあるのか。などと、話し合いの機会を設け、様々なアイデアや疑問をぶつけ合った。以下がその具体策である。

## 6) まちづくり提案 観光編

観光資源開発とインバウンド誘致は、日本政府の経済政策のうちの「目玉」であり、2018年度、日本の旅行収支は2兆3139億円の黒字で過去最高となった。豪雨や地震があったにも関わらず、訪日外国人観光客は初めて3000万人を突破し、観光収益は貿易収益（1兆1877億円）の2倍近くに達している。2019年の訪日外客数も、日韓関係の悪化などの逆風にさらされながらも、ラグビーワールドカップの追い風等の事情で、前年比2.2%増の約3188万人と発表されている。観光業は今や日本経済の中枢を担っていると言っても過言ではない。

日本政府も全国各地の自治体も、観光収益増加を見込んで文化財の観光資源化に向かって大きく舵を切り、文化財保護法の改正にまで踏み切ったが、2020年の新型コロナウイルスの大流行により、情勢が急変した。訪日外国人客は大幅に激減し、観光地は軒並み大打撃を被っている。私たちの町の観光業も例外ではないだろう。この状況下で、地域の観光産業をどのように再構築すべきか。私たちは、地域の歴史資源を生かす観点から考えてみた。

### 私たちの提案 アルチザンシップを感じるまち

感染症収束後は、国内外の富裕層、中間層、知的好奇心の高い層をターゲットに、「質の高い体験」を求める観光客の需要が徐々に回復すると予想される。こうした需要に応えると同時に、感染症や非常変災時の対応を十分に行うことがこれからの観光業界には求められている。

私たちは、関鍛冶に関わる諸職とふれあい、体験していく中で日本の伝統の重みや迫力を十分に味わうことができた。普段耳にする職人氣質という言葉の意味も、次第に理解できるようになってきた。彼らの言葉はまさに「ホンモノ」の魅力伝える言葉であり、こうしたホンモノのもつ価値が世界的に認知されるよう、民間企業や行政機関も今以上に日本の魅力を世界に発信することに力を入れていく必要があると考える。

そのためには、伝統産業のアピールのみでは不十分であり、その先にある先端技術（たとえば医療用メスや産業用カッター等）とのつながり、つまり伝統産業の現代技術への発展へのピーアールが必要である。場合によっては、漫画やアニメのようなフィクションをも取り込んだ戦略が必要である。ともすれば総花的な話になりがちなこの手の構想に、私たちは一本の軸を通すことを提案したい。その軸とは**アルチザンシップ**（職人氣質をあらわすフランス語）である。

核となるのはもちろん関市伝統の刀剣であり、その核に、様々なコンテンツを収斂させながら、関に行けば、「こだわりの職人に実際に会える」「こだわりの品を買い求めることができる」「ものづくりの現場を体験できる」といったように、アルチザンシップを肌で感じられるような仕組みを、まち全体に体現するのである。いいかえるなら「まち全体の産業テーマパーク化」と言ってもよい。

幸いなことに、今年度市制 70 周年を迎える関市は、目下、刃物ミュージアム回廊（せきてらす）を建設中である。多目的ホールや体験コーナーを備えた総合的な地域交流施設であり、近くには関鍛冶伝承館、フェザーミュージアム、刃物会館、濃州関茶屋、春日神社などがある。関市を訪れる観光客は、せきてらすを訪れることで、関のアルチザンシップの源流に触れ、先人の英知を知ることができる。その上で、市内各所に満ち溢れているものづくりの現場の楽しさを十分に味わってもらえれば、それはこの上ないことであろう。

技に生きるという観点から見れば、同じ関市内の小瀬鶉飼、郡上市の藍染、美濃市の手すき和紙や造酒屋、美濃加茂市の堂上蜂屋柿の県内の伝統産業も同じカテゴリーで捉えられるコンテンツと言えるし、技というジャンルとは異なるが、美濃加茂市内の臨濟宗古刹、伊深正眼寺の存在も見逃せない。臨濟宗は鎌倉・室町幕府の保護を受けた宗派であり、武家社会とともに発展してきた歴史をもつ。従来型の発想では、刀剣とは別物として扱われることが多かったが、刀剣・禅宗ともに武家文化の中核をなすコンテンツとしてとらえてはどうか。職人氣質と禅の求道精神を比較考察しても面白い。日本の和の心を求めるインバウンドにとっても魅力的なラインナップになると考える。

観光開発は市町を単位として推進されることが多いので、どうしても自身の「自治体ファースト」で進められるケースが多いと聞く。しかし訪れる側からしたらこれはまったくナンセンスであり、隣接地域も含めた提案こそが望まれる。アルチザンシップ構想には、関市だけではなくその隣接地域もエリアの中に含めて考えていきたい。

## 7) まちづくり提案 生涯学習編

果たして観光客が、刀剣を軸としたこの地域の観光資源に魅力を感じてくれるのだろうか。これは多くの人が抱く疑問である。

しかし、この問題には「明らかな正解」への道筋がある。それは実際に地域に暮らし、地域を知る私たちが、どれほど地域の伝統を理解し、愛着を持てるかということにかかっていると考える。

飛騨を例に考えてみたい。飛騨は岐阜県の中でも郷土愛が強く連帯感のある地域として知られている。私たちも SGH 活動の中で日帰り飛騨ツアーに行ったり、家族で出かける機会があるのだが、飛騨の人々に接すると、郷土の言葉や料理、生活習慣に対する深い愛着が感じられる。そうした姿に私たちも知らず知らずのうちに惹かれていく。飛騨を訪れる多くの観光客もそうであろう。

であるならば、私たちこそが、自分たちの地域の文化をまず知るべきである。それは年齢や職業、社会的な立場には一切関係ない。学びたいと思った時に、学べる場所や方法が確保されていることが大切である。幸い、関市には立派な市立図書館があるし、関鍛冶伝承館のような公的施設もある。生涯学習に関する様々なイベントも企画されている。さらに近年では、地区ごとの地域委員会の自主活動も盛んである。昨年、私たちは、関市富野

地区の地域委員会の方々と史跡探訪を行った。富野は山あいの静かな地域であるが、そこには平安期から室町期にかけての仏像、南北朝創建の寺院、岐阜県最大規模の山城があり、まさに中世史が息づくようなまちであった。

富野地区の方々は、決して専門研究者ではないが、懸命に地域の歴史を学び、史跡保全に努め、訪問者への案内を無償で続けている。そこで私たちがみたものは、行政サービスとしての生涯学習ではなく、地域の人々自身が築き上げた真の学びであった。体験型・滞在型を好むインバウンドにとっては、こうした学びこそが魅力的なコンテンツなのであり、彼らが自らの体験を SNS で発信するような流れをつくることこそが何よりの宣伝効果を生む。

実際、関市内では英語の堪能な和食シェフが積極的に SNS による発信を行い、体験型キッチンで大勢のインバウンドを集め話題を呼んだ（関市西町そば処山久の小瀬木周司さん）。

コロナ禍でインバウンド訪問こそ止まったが、現在、小瀬木さんは、Zoom によるリモートキッチン教室で人気を博している（右写真）。ウィズコロナの新しい観光の在り方であろう。



## まとめ

地方には若者の人口流出をはじめとする多くの課題がある。また、この研究に携わった私達も大学進学を志望しており、この地元を離れ、各地へ飛び立つことになるであろう。この研究を通して、日本刀についての知識が深まることはもちろん、こうした伝統産業をどのような形で地域の宝とし、地域創生に結びつけることができるかを考える機会となった。そして、地域のために精力的に活動し、情報を発信し続ける素敵な方々と出会うことができた。

現在、私たちは、地域研究部による考古学・人類学的なアプローチ、自然科学部による科学的なアプローチ、さらには観光や生涯学習の分野にまでリーチを広げ、異分野融合の研究を成し遂げようと努力している。

一見、関わりの見えない学問を共有したことによって、新たな視点を得たように、これからの学びを広域的に生かしていきたいと思った。実際、私たちの研究メンバーが進むであろう学問分野は多種多様である。地元から離れてもこの故郷を忘れず、それぞれの学問分野で貢献できる方策を探究していきたいと強く思う。

最後になったが、この一文を、高校同窓の先輩である故青木啓将さんに捧げたい。

ご遺族より本校図書館に寄贈された遺作との出会いが、この研究のスタイルや展望につながった。ここに記して感謝申し上げたい。

## 【添付資料】 参考・引用文献リスト

- ・青木啓将『現代日本刀の生成 物質性をめぐる 人類学的研究』言叢社 2019
- ・角田徳幸『たたら製鉄の歴史』吉川弘文館 2019
- ・「国際収支経常黒字 13%減」毎日新聞東京朝刊記事 2019.2.9

以下の文献は、関高校 HP 公開で公開されている「関高 SGH 情報」「関高 FRH 情報」のうち、刀剣や戦国時代等、今回の研究テーマと関わる報告を扱ったものである。執筆に関しては、地域研究部員が担当した。

- ・「2019 関高 SGH 情報 第 10 号」2019.6.18  
関市富野地区のフィールドワーク  
[https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019\\_sghjoho\\_10.pdf](https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019_sghjoho_10.pdf)
- ・「2019 関高 SGH 情報 第 14 号」2019.7.10  
加茂郡富加町のフィールドワーク  
[https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019\\_sghjoho\\_14.pdf](https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019_sghjoho_14.pdf)
- ・「2019 関高 SGH 情報 第 24 号」2019.9.19  
朝日大学戦国武将作文コンクール  
[https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019\\_sghjoho\\_24.pdf](https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019_sghjoho_24.pdf)
- ・「2019 関高 SGH 情報 第 48 号」2020.1.7  
関市・山県市のフィールドワーク  
[https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019\\_sghjoho\\_48.pdf](https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019_sghjoho_48.pdf)
- ・「2019 関高 SGH 情報 第 92 号」2020.3.9  
日本刀生産に関する探究活動  
[https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019\\_sghjoho\\_92.pdf](https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019_sghjoho_92.pdf)
- ・「2020 関高 FRH 情報 号外その 5」2020.6.11  
「岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第 3 号」  
[https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/student/pdf/club/regional\\_studies\\_club\\_report03.pdf](https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/student/pdf/club/regional_studies_club_report03.pdf)
- ・「2020 関高 FRH 情報 第 8 号」2020.6.24  
たたら製鉄実験に関する報告  
[https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/frh/pdf/joho/r02/2020\\_frhjoho\\_08.pdf](https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/frh/pdf/joho/r02/2020_frhjoho_08.pdf)
- ・「2020 関高 FRH 情報 第 12 号」2020.7.9  
第 1 回さくら塾 柳田佳彦氏 関市観光振興トータルプロデューサー  
[https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/frh/pdf/joho/r02/2020\\_frhjoho\\_12.pdf](https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/frh/pdf/joho/r02/2020_frhjoho_12.pdf)

# 応永年間、関鍛冶に何が起きたのか

## ～関鍛冶成立期に関する探究～

那須優花 小林未紗 岩井萌々子 赤羽葉那 山内康誠 藤井大輝  
小山政亮 田中莉子 藤村彩須果 小原和也 河路康太 渡邊貫太



卸し鉄実験の様子。溶解した鉄塊を平箒で炉底から取り出す。

## 目 次

- 1 はじめに
- 2 関鍛冶成立期に関する文献史学の研究
- 3 古町遺跡と重竹遺跡の調査
- 4 たたら吹きによる砂鉄製錬と卸し鉄（おろしがね）精錬の実験  
(1) 砂鉄製錬と卸し鉄 (2) 第1回実験 (3) 第2回実験 (4) 鉄素材の活用について
- 5 刀剣職人への聞き取り調査  
(1) 刀匠（鍛冶師）の仕事 (2) 研師の仕事 (3) 拵えの仕事
- 6 ふたつの遺跡をめぐる解釈  
(1) 古町遺跡の鍛冶遺構と勢至の鉄座 (2) 重竹遺跡の鍛冶屋敷  
(3) 古町遺跡・重竹遺跡と「鍛冶座」
- 7 まとめにかえて ～関鍛冶成立の背景に関する考察～

## 1 はじめに

美濃国武儀郡鞍智郷関町（岐阜県関市）を本拠とする関鍛冶は、他の刀剣産地、山城・大和・相模・備前より遅れ、応永年間（1394～1428）にようやく成立した。刀剣生産のピークは大永年間から弘治年間（1511～58）のことであり、最盛時には200人を超す職人が技を競った(注1)。本稿の目的は、関鍛冶成立期に注目し、往時の関町の様相を文献史学・考古学・製鉄実験・民族誌の諸分野から検証にすることにある。

関市内では、14～16世紀の鍛冶工房跡（古町遺跡）や、14～17世紀の鍛冶屋敷跡（重竹遺跡）が調査されている。いずれも関鍛冶の成立を探る上で重要な遺跡である。私たちは、ふたつの遺跡の調査成果に学ぶとともに、製鉄実験や刀剣職人の方々への聞き取り調査、文献研究を並行して行い応永年間に焦点を当てた研究を行うことにした。

今回の研究は、関鍛冶の伝統を継ぐ吉田研刀匠とご子息の吉田政也刀匠のご協力によって進めることができた(注2)。伝統技術に関する聞き取りはもちろん製鉄実験に関しても惜しみないご協力をいただいた。なお、刀剣・製鉄の専門用語に関しては添付資料に付した。

## 2 関鍛冶成立期に関する文献史学の研究

関鍛冶に関する文献史学研究の分野では、元関市史編纂委員の古田憲司氏の論考を軸に研究を進めた(注3)。関鍛冶成立期に関する古田氏の主張の骨子は以下の通りである。

- (1) 応永年間、直江（養老郡養老町）から関への刀工の移住により関鍛冶が成立する。
- (2) 中世の関は刃物の町であると同時に番匠（建築工）の町としても知られていた。番匠の活動の開始も応永年間であり、建築業と刃物産業は当初からセットであった(注4)。
- (3) 関町の支配には、幕府奉公衆として知られる鞍智氏の代官石井氏が関わったが、その支配は緩やかで商工業者の自由な活動が保証されていた。
- (4) 関鍛冶の発展の背景には日明貿易や中世動乱による需要の高まりがあった。
- (5) 主原料である山陰の鉄は、日本海舟運で小浜・敦賀まで運ばれ、近江今津・塩津を経由し湖東の湊から伊勢街道を通して揖斐川・長良川を経て関に運ばれたと考えられる。
- (6) 山陰から運ばれる鉄素材（銑・鋸）は、勢至（養老郡養老町）で包丁鉄や鋼に精錬され関まで運ばれた。手間の省けた鍛冶は鍛造に専念できた。

古田氏の主張のうち、(1)(2)(4)(5)に関しては史料をもとに詳細な検討がされており異論はない。(3)(6)に関しては後述したい。

## 3 古町遺跡と重竹遺跡の調査 ～中枢の遺跡、周縁の遺跡～

2018・19年、古町遺跡では、鍛冶工房の所在を裏付ける多数の炉跡や柱穴などの遺構とともに、14～16世紀の陶磁器類、羽口・短刀・鍛造剥片・椀形滓・粒状滓・砥石などの鍛冶関連遺物が検出された。重層的に見つかった遺構の状況から、精錬や鍛錬が繰り返し行われた様子がうかがわれる。古町遺跡は関鍛冶の守護神・春日神社に隣接する。関町の中枢に位置したと考えられる(注5)。

古町遺跡調査のおよそ30年前、関市街地から離れた重竹遺跡では、土塁と堀で区画された室町～近世初期の鍛冶屋敷跡が見つかった。建物内部からは火床・焼土・木炭・鉄滓・羽口・砥石等が検出された。出土遺物には、14～17世紀初めの陶磁器類、短刀・小柄・鋸・切羽・鉄鏃・槍金具・筭・火打金・鎌・鋏・釘・鋸・留め金具・鉄輪・毛抜き・鉄錘などが含まれる。砥石の中には粗砥から仕上砥まで各種のものがある(注6)。

関町の中枢と周縁にそれぞれ位置するふたつの遺跡に関する考察は後述する。

## 4 たたら吹きによる砂鉄製錬と卸し鉄(おろしがね)精錬の実験

炉跡・火床・焼土・鉄滓といった鍛冶関連の遺構や遺物の理解を深めるために、吉田刀匠の指導の下、砂鉄製錬と卸し鉄の実験を行うことにした。実験は2回に渡って行った。

### (1) 砂鉄製錬と卸し鉄

製鉄の工程は、砂鉄を還元し鉄素材をつくる製錬、不純物除去や炭素濃度調整のための精錬(卸し鉄・大鍛冶)、製品に仕上げる鍛造(小鍛冶)とに区別される(注7)。

砂鉄の製錬にはフイゴ(たたら、送風施設)を有する製鉄炉が使われる。たたら製錬(たたら吹き)は古代から近世にかけて発達した製鉄法で、フイゴを用いて鉄を作り出す技法である。炉内に砂鉄と木炭を交互に入れフイゴで燃焼させ、比較的低温で純度の高い鉄を生産する工程を指す。卸し鉄とは、炉内で軟鉄への浸炭もしくは銑鉄からの脱炭を行い炭素濃度を調整して鋼を作る工程を指す。素材の分量が少ない場合には火床で卸し鉄を行う場合もあるが、今回は砂鉄製錬を行う炉を使用して行った。

### (2) 第1回実験(2020年6月21日 関高校校庭)(注8)

より高温を必要とする砂鉄製錬を後にまわし、最初に卸し鉄の実験を行った。鉄製の簡易炉を4段に組み上げフイゴ代わりに電動送風機を使用した。木炭が勢いよく燃え上がったから古鉄(江戸期の金具類等)3キロを投入した。古鉄に炭素が吸着すると融点が下がって半溶融状態になり炉底に少しずつ落ちて堆積する。堆積した鉄塊をテコで掘り出し水に漬けて冷やすと鋸と呼ばれる鉄素材ができる。金槌でたたくと不純物が崩れ、2・5キロほどの鉄素材ができあがった。

次に砂鉄製錬を行った。今回は吉田刀匠が長良川で採取した砂鉄3キロを用いた実験を行った。4段組み簡易炉に木炭を投げ入れて加熱し、炭火が真っ赤になったところで砂鉄を500グラムほど振りかける。炭火が焼き崩れた隙間にさらに新たな木炭を詰め、燃え上がったら砂鉄を再度投げ入れる。この作業を6回繰り返し火勢が収まるのを待つ。テコで掘り出し水に漬けて冷まし金槌で不純物を取り除くと鉄素材500グラムができあがった。

### (3) 第2回実験(2020年7月26日 加治田刀剣工房)(注9)

校庭で行った前回とは異なり、今回は加治田刀剣の工房内にある永代炉(据え付け炉)で実験を行った。手法・工程は前回同様である。結果、古鉄3キロを使った卸し鉄では2・2キロの鉄素材を、砂鉄5キロを使った製錬では1キロほどの鉄素材を作り出すことができた。砂鉄のうち2キロ分は本校生徒が長良川で採取した。卸し鉄では原材料の7割、砂鉄製鉄では2割ほどの鉄素材を確保できた。吉田刀匠や山末英嗣教授(立命館大学理工学部、材料工学)のお話では、歩留まりはこの程度かやや良い方だとのことであった。今回は、簡易測定器で炉内の温度を測定し、炉内温度が1000度以上に達したことを確認した。

### (4) 鉄素材の活用について

製錬で作られた鉄素材は不均質であり、空孔や不純物が含まれているので再処理が必要である。以下に、再処理に関する吉田研刀匠からの聞き取りを報告する。

卸し鉄でできた鉄素材は、そのまま積み沸かしからの折り返し鍛錬に用いられる。砂鉄を溶かしてできた鋸は、炭素量が「頃合い」であれば通常の鍛錬が可能であるが、炭素濃度が不適切な場合は、ある程度(通常3キロ程度)まとめておいて卸し鉄で再処理を行う。炭素濃度を調整し「頃合い」の材に仕上げて鍛錬にまわすことになる。

「頃合い」とは何か。吉田刀匠に具体的説明を求めると、「数値ではなく身体で覚えるも

の」との説明を受けた。まさに職人仕事を通じて会得される感覚的な表現である。こうした感覚に関し実証科学はいかに対峙するべきか。今回、私たちは研究の方向性すら見出すことができなかつた。今後の課題のひとつである(注 10)。

## 5 刀剣職人への聞き取り調査 ～刀剣生産をめぐる民族誌～

関市では刀剣産業に関わる様々な職人が伝統の技を今も継承している。鉄を鍛え、刀に仕上げ、磨き上げ、美しく飾る。このプロセスの基本形は今も受け継がれている。もちろん時間的経緯を重ねる中で変わった部分もあろうが、現在の職人仕事との比較を通じ、遺構や遺物の解釈を試みてはどうだろう。そのように考えた私たちは、文化人類学者の青木啓将氏の研究成果に学び、刀剣職人の工房で仕事の実際を直接うかがうことにした(注 11)。

### (1) 刀匠(鍛冶師)の仕事

たたら製鉄実験に先立って、吉田研刀匠や加藤正文実刀匠の工房を訪ねた。玉鋼の加熱、積み沸かし、折り返し、作り込み、素延べ作り、形成、火造り、センスキ、荒仕上げ、土置き、焼き入れにいたる刀剣鍛錬の諸工程を、道具類や原材料、半製品を実見しながら詳しく学んだ。私たちは、ごく単純に、砥石を用いるのは研師の仕事であろうと考えていたのだが、刀匠も砥石を用いることを知り、刀匠による荒仕上げ工程に関心をもった。

### (2) 研師の仕事

伊佐地亨氏及びご子息の昌充氏の工房を訪ねた。大まかに成形された刀を、粗砥に始まり砥石片を和紙に漆付けした砥石を使って仕上げるまでの作業を経て、独特の光沢や刃文を出す諸工程について学んだ。刀剣を武器として使用する場合には粗砥で十分であること、中砥や仕上げ砥は美術刀に必要であることについても教えていただいた。

### (3) 拵えの仕事

鞘師の森隆浩氏、束巻師の遠山康男氏の工房を訪ねた。樋入れ、銘切りの終わった刀身は、研ぎにかけ鉤を取り付けたのち、鞘・柄・鐔などの刀装具をつけて完成する。この間、研師・白銀師・鞘師・塗師・柄巻師が関わる。鞘ひとつとっても、刀剣の反りがそれぞれ異なるので刀身に合わせた鞘を作らねばならない。それぞれの職人の専門性や「こだわり」についても学べた。鞘や柄は有機物であり、遺跡から検出されることはほとんどない。拵えの仕事を学ぶことにより考古学のみでは知り得ない分野の知識を得ることができた。

## 6 ふたつの遺跡をめぐる解釈

### (1) 古町遺跡の鍛冶遺構と勢至の鉄座

今回の製鉄実験により、大量の砂鉄と木炭を使い風を絶やすことなく送って火をおこし続けられれば、わずかな量であっても鉄を生産できることを体験できた。実験で使った炉は、移動式簡易炉と永代炉であるが、日本美術刀剣保存協会の古式たたら製錬では、製錬のたびに粘土製の炉を破壊して鉄を取り出している。実験を体験してみて、古町遺跡から炉底や焼土の痕跡、炉底にたまった椀形滓が重層的に検出されている理由がよく分かった。おそらく、炉の構築と稼働、取り壊しと再構築を繰り返した結果であろう。出土陶磁器類の年代観から、鍛冶工房の稼働期間は 14 世紀末から 16 世紀にかけてのことと考えられる。

古田憲司氏は、関へ供給された鉄は山陰の鉄であり、勢至の鉄座で精錬された鋼や包丁鉄が持ち込まれたと推定する。しかしながら古町遺跡内から、大量の椀形滓が出土していることから、勢至から持ち運ばれた鋸や銚が古町の炉群で精製された可能性も否定できない。現在進行中の資料整理作業や鉄滓の科学分析の結果が待たれるところである。

## (2) 重竹遺跡の鍛冶屋敷の性格 ～野鍛冶を兼ねた在郷の刀鍛冶～

鍛冶屋敷を囲む土塁の規模は北辺内径約 39m、南辺内径約 25m、南北間内径約 35mで、面積は約 1,120 m<sup>2</sup>に達する。屋敷内に礎石建物 3 棟があり、このうち 1 棟から 3 か所の火床が検出された。火床からは焼土・木炭・鉄滓・羽口が出土している。検出された火床を今日の刀剣工房で目にするそれ比べると、用途や外観の基本形を変えていないことがわかる。遺構や遺物の状況からみて、刀鍛冶が行われていたことは間違いないが、多数の鉄製農工具が出土していることから、同時に野鍛冶を兼ねていたとみてよい。出土陶磁器類の年代から、鍛冶屋敷の操業期間は 14 世紀から 17 世紀初頭まで続いたと考えられる。

重竹遺跡の所在地は関市下有知(武儀郡下有知村)であり関町から 3 キロ隔たっている。刀剣の銘文の中に「蜂屋関」「小山関」「坂倉関」とあるように、武儀郡に隣接する加茂郡に関鍛冶を名乗る鍛冶師が工房を構えた事例もある。重竹遺跡の鍛冶屋敷は、野鍛冶を兼ねた在郷の刀鍛冶の実態を知る上で貴重な事例となった。

## (3) 古町遺跡・重竹遺跡と「鍛冶座」

史料は存在しないが、時代の趨勢から考えて応永期の関鍛冶がすでに組織的な「鍛冶座」を持っていたことは容易に想像できる。関鍛冶には 7 つの流派がありそれぞれの頭領が組織をつくりあげ、16 世紀初頭までには七頭制が成立していたと考えられる。七頭の祖と伝えられる人物の活動期間は、応永・永享期に集中しているので、七頭制の前身となった「鍛冶座」が室町初期には成立していたとみてよい(注 12)。

「鍛冶座」は、鉄素材や製品の流通経路、鉄素材を鍛冶仲間に供給するシステムを統括していたと考えられる。当然、古町遺跡の工房も「鍛冶座」の管理下にあったとみるべきである。運ばれた鉄素材は、古町の「鍛冶座」直営工房で精錬・鍛錬され、さらには重竹のような周縁部に位置する在郷の鍛冶屋敷にも広く供与されたのであろう。周縁を取り込んだ「鍛冶座」のシステムが構築されたことにより量産が可能となり、関は日本最大の刀剣産地へと発展を遂げた。春日神社こそがその「鍛冶座」の本所であり関鍛冶の守護神であった。春日神社に隣接して立地する古町遺跡発掘の意義は大きい。

## 7 まとめにかえて ～関鍛冶成立の背景に関する考察～

本稿を結ぶにあたって、関鍛冶の歴史を探る中、片時も脳裏を離れなかった問いに関し、私たちなりの考察を述べようと思う。それは、備前のような鉄の一大生産地でもなければ、京都・奈良・鎌倉のような巨大消費地でもない関の地が、応永年間、どうして刀剣の産地として成立できたのか。そしてその形成主体は誰であったのかという問いである。

前者に関しては古田憲司氏の所説に説得力を感じた。古田氏は、①後発地の関で刀剣生産が本格化する室町初期には、流通経済の発展によって鉄生産地や消費地でなくとも刀剣生産地として十分発展し得たこと、②日明貿易や中世動乱を背景に刀剣の需要が伸びたことのふたつを、関町発展の基礎条件として挙げている。その上で、直江鍛冶の関への集団移動が、関鍛冶の成立に寄与したことに言及している。

では、誰が直江鍛冶を関に誘致し受け入れたのか。守護代斎藤氏の関与を指摘する説もあるが(注 13)、古田氏は、応永期の関町が斎藤氏の支配下にはなく、奉公衆鞍智氏の所領であったことをはじめとする様々な疑問点を列挙してこの説を否定する。当然、直江鍛冶の集団移住も商工業者の自主判断によるとみなす。

私たちは古田氏の見解を支持しつつも、鞍智氏が奉公衆であった事実を重視し、武家関

与説を再検討してみた。鞍智氏支配がたとえ緩やかであったにせよ、奉公衆には相応の軍備が必要であるから、鞍智氏が自領への直江鍛冶の集団移住を支援しても不思議ではない。

私たちは、鞍智氏以外の奉公衆として土岐明智氏に着目した。土岐明智氏は美濃守護土岐氏庶流で、美濃国内では土岐郡妻木郷（土岐市）、武儀郡（関市等）、多芸郡（大垣市・養老町）の地頭に任じられた(注 14)。土岐明智氏の所領の中でも、今回注目すべきは多芸郡榛木（養老町飯ノ木）と武儀郡安弘見（関市広見）である。榛木は直江や勢至まで 3 キロ。同じく広見は長良川を渡れば関町まで 4 キロ。関鍛冶ゆかりの地に極めて近い。

勢至から関町をめざす場合、牧田川を下り揖斐川に抜けさらに長良川をさかのぼるルートを設定し得る。関町へは長良川支流の津保川・関川を遡上するか、あるいは広見対岸で陸揚げして運ぶか、どちらかのルートが取られたと考えられる。古町遺跡は津保川支流の関川河畔に位置する。関川に関しては関城を囲む惣構として人工的に掘られたとする説があるが(『新修関市史通史編 自然・原始・古代・中世』1996)、鉄素材搬入を目的に、関城築城以前、おそらくは応永年間に整備されたとみなしたほうがよいのではないだろうか。実際、津保川・関川合流点から古町遺跡まではわずか 500m ほどである。

土岐明智氏の支配下にあった広見は、元来は長講堂領の宇多院（宇陀弘見荘・広見荘とも）であり、応永期の領家は鷹司家であった。鎌倉期には二階堂氏が地頭職を務め、康正 2 年（1456）には広橋氏の知行地であったことが知られている。伝領の経緯は不明だが、南北朝期から応永年間までは土岐明智領であった(注 15)。広見の地は長良川支流の武儀川流域に広がる肥沃な地で和紙生産が盛んな地であり、和紙を都方面に運ぶ河川交通が発達していた。在京奉公衆の土岐明智氏は、当然、美濃と京都を結ぶ河川交通にも関与していたはずであり、鉄素材搬入にはこの河川のルートが使われた可能性が考えられる。

商工業者の自主的経済活動の一環として直江鍛冶の移住が図られたとしても、直江と関町、双方の隣接地域に所領を持っていた土岐明智氏はその動向と無縁であったとは考え難い。同じく奉公衆であり関町の領主鞍智氏ならばなおさらである。

土岐明智所領のひとつ土岐郡妻木郷には、15 世紀中葉から後葉にかけての一定期間のみ稼働した古瀬戸系施釉陶器窯が確認されている。論拠となる文献史料はなく、あくまで推論ではあるが、わずか数十年で操業停止となるこの窯に関し、土岐明智氏との関わりを指摘する三宅唯美氏の見解がある(注 16)。三宅氏の指摘通り、土岐明智氏が土岐郡内で産業振興に努めたとするならば、武儀郡内での刀剣生産に関わっていても不自然ではない。

以上、私たちは、様々な角度からアプローチを加えた上で、関鍛冶成立期の様相に関し古町遺跡と重竹遺跡の解釈を軸に考察を試みた。研究を進めるにあたって、吉田刀匠をはじめとする長年刀鍛冶に携わる職人の方々にお世話になった。刀剣製作の技術は時代とともに変化を遂げたが、「鍛える」「磨く」「飾る」プロセスの基本形に変化はない。この町に、応永年間以来絶えることなく槌音が響き渡っていたことを思う時、伝統のもつ重みや関の地で学ぶ誇りを感じずにはいられない。

末尾になったが、私たちの研究に関わってくださった下記の方々や関係機関に、感謝とともに敬意を表したい。

吉田研氏・政也氏、加藤正文実氏（刀匠） 伊佐地亨氏・昌充氏（研師） 森隆浩氏（鞆師）  
遠山康男氏（束巻師） 山末英嗣氏（立命館大学） 関市文化財保護センター 関市商工課

## 【刀剣・製鉄関連用語】

筭（こうがい）：鞘の差表にさしておく箸状の工芸品。髪をなでつけるために用いる。

小柄（こづか）：鞘の差表（さしおもて）にさす小刀の柄。

切羽（せっぱ）：刀の鐔の表裏がそれぞれ柄と鞘に接する部分に添える薄い金具。

束巻（つかまき）：柄を鮫皮（実際はエイ皮）で包み巻いた部分。

鉤（はばき）：刀身が鞘から抜け落ちないようにするための金具。

製錬・精錬：鉤物を還元し金属を取り出す工程が製錬。さらに純度を高める工程が精錬。

鉤（けら）：たたら吹きによって砂鉄からつくられる海綿状の粗鋼。

のろ：精錬の際に生じる鉤物由来の不純物。

銑（ずく）：たたら吹きで還元して取り出した鉄。3～4%の炭素と少量の珪素・硫黄・燐などの不純物を含み硬くてもろい。

玉鋼（たまはがね）：炭素濃度が低い鋼（1.03～1.7%）の中での最上級品を指す用語。

包丁鉄（ほうちょうてつ）：錬鉄・割鉄・延鉄とも。低炭素（0.08～0.26%）で不純物が少ない。銑（ずく）や歩鉤（ぶけら、玉鋼と銑の中間）を火床で脱炭してつくる。

## 【補注】

(1) 『新修関市史 刃物産業編』1999

(2) 加治田刀剣 web <https://www.kajita-token.com/>

(3) 補注（1）参照

(4) 応永年間是比较的安定した時代として知られ、全国的に社寺建築・再建が進められた。岐阜県内でも関の番匠が手掛けた下呂市久津八幡神社本殿が知られている。

(5) 『関市遺跡発掘情報』関市文化財保護センター2019、古町遺跡現地説明会資料2018

(6) 『重竹遺跡 I 岐阜県関市下有知土地改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（関市文化財調査報告5号）1979

(7) 日本刀鍛錬や製鉄に関する理化学的研究に関しては以下の2編の論文を参考にした。

齋藤努・坂本稔・高塚秀治「刀匠が継承する伝統技術の自然科学的調査」「大鍛冶の炉内反応に関する実験的再現」『国立歴史民俗博物館報告 第177集』2012

(8) 「関高 FRH 情報 第8号」2020 第1回製鉄実験

[https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/frh/pdf/joho/r02/2020\\_frhjoho\\_08.pdf](https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/frh/pdf/joho/r02/2020_frhjoho_08.pdf)

(9) 「2020 関高 FRH 情報 第15号」2020 第2回製鉄実験

[https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/frh/pdf/joho/r02/2020\\_frhjoho\\_15.pdf](https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/frh/pdf/joho/r02/2020_frhjoho_15.pdf)

(10) 「頃合い」の語にみられるような「職人技」に関しては補注（7）でも検討されている。

(11) 調査にあたっては故・青木啓将氏の『現代日本刀の生成—物質性をめぐる人類学的研究』（言叢社2019）を参照にした。概要は「2019 関高 SGH 情報 第92号」にまとめた。

[https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019\\_sghjoho\\_92.pdf](https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019_sghjoho_92.pdf)

(12) 補注（1）参照。呼称を示す史料がないので「鍛冶座」とカッコ付き表記とした。

(13) 尾関章「なぜ『関に』なのか あるいはなぜ『九州』からなのか」『関鍛冶の起源をさぐる』1995

(14) 『岐阜県史 通史編中世』1969、『岐阜県史 史料編古代・中世四』1973

(15) 補注（14）を参照。

(16) 三宅唯美「室町幕府奉公衆土岐明智氏の基礎的整理」『織豊大名の研究 8 明智光秀』2019

**【写真図版 その1】 第1回製鉄実験 卸し鉄(古鉄の精錬)の様子**



簡易炉に木炭を入れ着火



4段に積んだ簡易炉一杯に木炭を詰める



木炭の補充



木炭が燃え落ちたあとの簡易炉底部の状態



炉底から溶解した鉄を取り出す



砂鉄からできた鉄素材

第1回実験（2020年6月21日）は、コロナ禍の下、外部との接触をなるべく少なくするために関高等学校の中庭で実施した。写真で示した卸し鉄による精錬に加え、砂鉄製錬も行った。製鉄には大量の木炭を使用する。アカマツ製の松炭は火付きがよく燃焼性が高いので、たたら吹きによる製錬・精錬、鍛造に適しているといわれる。加治田刀剣では岩手県産アカマツを使用している。木炭を燃えやすくするためナタを使って小さく切る「炭切り」の作業も行った。

【写真図版 その2】 第2回製鉄実験 「せきの未来・社会貢献プロジェクト」



永代炉で砂鉄製錬開始



長良川で採取した砂鉄



炉底から鉞を採す作業



約1キロの鉞



実験終了後の山末英嗣氏のセミナー



関市長による「みらプロ」認定式

第2回実験（2020年7月26日）は加治田刀剣工房で永代炉を使って実施した。実験終了後、山末英嗣教授（立命館大学理工学部）によるセミナーを受講し、材料工学の観点からたたら製鉄の仕組みを学んだ。なお、加治田刀剣と関高等学校による今回の取り組み（関鍛冶に関する研究及び普及活動）は、「せきの未来・社会貢献プロジェクト」（略称：みらプロ）のひとつとして、関市より認定された（2020年7月28日）。

### 【写真図版 その3】 刀剣職人をめぐる民族誌



加治田刀剣を訪問



藤原兼房刀剣鍛錬場を訪問



左：仕上砥の説明 右：「和泉守兼定」の銘を確認（研師伊佐地亨氏宅）



鞘材のホウノキ（鞘師森隆浩氏宅）



柄に巻く鮫皮（束巻師遠山康男氏宅）

文化人類学者の青木啓将氏が、関市の刀剣職人に対し民族誌 (ethnography) の手法を用いた研究を進めたことを知った (『現代日本刀の生成 物質性をめぐる人類学的研究』言叢社 2019)。偶然にも青木氏は私たちの高校同窓の先輩であった。ぜひお会いし教えを請いたいと願ったが、すでに逝去されていることを知り愕然とした。今回の研究を行うにあたり、一同、青木氏の著作に大いに啓発されたことを記しておく。

## 【写真図版 その4】 焼き入れ後の刀剣製作工程



左：茎の美観を整えるヤスリ目 右：タガネを使った銘切 とともに刀匠の仕事



地肌や波紋まで調整する研ぎの仕事



鮫皮・紐を巻く束巻の仕事



細かな金工細工を施す鐺師の仕事



刀身を固定する釦を作る白銀師の仕事



刀身を収める鞘作りは鞘師の仕事



鞘に漆を塗り仕上げる塗師の仕事

関市は、鐺師以外の刀匠（鍛冶師）・研師・束巻師・鞘師・塗師・白銀師が集住する日本で唯一の地域であるといわれる。遺跡から検出される炉・火床のような遺構や、短刀・小柄・鐺・筭・釦・砥石・切羽・槍金具・鍛造剥片・鉄滓（椀形滓・粒状滓等）といった遺物が、どのように使われ作られるのか。往時を彷彿とさせる手仕事を間近で観察し、説明を聞くことができた。今後さらに継続する予定である。（写真提供：加治田刀剣）

## 【写真図版 その5】 古町遺跡の出土遺物



- 左： 出土した砥石類。大半が粗砥で受熱痕跡が残る。砥面がなめらかになり過ぎた粗砥は、新たな砥面を作出するため火中に投じて意図的に割ったと考えられる。
- 右： 鍛造剥片と粒状滓。遺跡から持ち帰った土をふるいにかけて検出したもの。現在の日本刀鍛錬の現場でも、同様の鍛造剥片や粒状滓が生成される。



出土した椀形滓の総重量 160 キロに達する（関市文化財保護センター伊藤聡所長の話）。製錬・精錬・鍛造のどの過程に関わる鉄滓なのか。その謎の解明は、現在進行中の資料整理作業、科学分析により明らかにされるはずである。



古町遺跡付近を流れる関川（写真左）。津保川との合流点付近の様子。この合流点から500mほどさかのぼると古町遺跡にいたる。背後の安桜山には、守護代斎藤氏に仕えた長井氏により関城が築かれた（16世紀前半）。右の写真は関川をはさんで古町遺跡の東側に位置する春日神社鐘楼。江戸期までの神仏習合の名残をとどめる。背後は安桜山。

# 「織田信長の東美濃攻略戦」とまちづくり

田中莉子 藤村彩須果

## はじめに

私たちは地元素晴らしい歴史があることを知った。それは織田信長の東美濃攻略戦である。織田信長は岐阜という名をつけたことで有名であるが、関市に侵攻したという情報は広くに行きわたってない事実である。そこで、地元である富加町や関市の方々と連携し、織田信長東美濃攻略戦について、織田信長が侵攻した経路順にたどるフィールドワークを行った。そのフィールドワークでは、遺跡が形として残されていること、戦に適した地の作りに工夫が施されていること、信長の戦い方の特徴がわかることなど、様々な観点で歴史を感じさせ、それが現在でも目にすることができるということが分かった。

私たちはこのような事実を多くの人に知ってもらい、まちづくりの一環として活用できないだろうかと考えた。

## 東美濃攻略戦の概要

信長の東美濃攻略戦を、『信長公記』を基本史料にたどってみると以下の通りとなる。厳密に言えば、二次史料ではあるが、著者の太田牛一は弓衆として信長に仕えた側近のひとりであり、東美濃攻略戦にも出陣している。一次史料と合わせて注意深く読めば、ある程度まで史実をうかがえると思われる。以下に紹介しておく。

永禄6（1563）年、信長は居城を小牧山に移し築城する。その後、尾張における最後の反信長勢力だった織田信清の犬山城を攻めて開城させる。いよいよ尾張一国を統一した信長は、今までの方針であった、西美濃攻略から方向転換する。東濃に目をつける手もあったが、東濃勢力は、武田氏とつながっていたため、無用な刺激を避けるため、この策はとらなかったようだ。その点、東美濃（現在の中濃地域）であれば、東濃の勢力を牽制しながら、美濃国の主、斎藤龍興の居城稲葉山城（岐阜城）の背後をとることができる。そのことから、東美濃の加茂郡・可児郡に目を付けたと考えられる。

信長は、美濃と尾張の国境である木曾川を超え、犬山城の対岸の伊木山（各務原市）に陣を構える。斎藤方であった鵜沼城の大沢次郎左衛門は、間もなく信長の軍門に下り、信長勢は次に猿啄城（坂祝町）へ攻め込む。猿啄城には、丹羽長秀が攻め上り、守っていた多治見氏が退散してしまう。信長は、幸先が良いとしてこの地を「勝山」と改め、河尻秀隆に与える。

そして、永禄8（1565）年、信長の東美濃攻略戦での最大の攻防戦である、堂洞合戦へと戦局が発展していく。まず信長は、金森長近を堂洞城（富加町）へ派遣し、最後の説得を試みた。しかし、城主の岸勘解由は、斎藤家に忠義を尽くし、関城主長井隼人との盟約を守り降伏を拒否し、その場で息子の孫四郎に5歳と7歳の孫を殺めさせ、覚悟を示したという。また、織田方に寝返った佐藤紀伊守から嫁いでいた娘を、竹槍で刺し「長尾の丸山」にさらすなど、悲壮な逸話が残っている。これにより、開戦は避けられないものとなり、信長は陣を高畑（富加町）の小高い山に布き、加治田勢とともに堂洞城への攻撃を開

始する。高畑には、津保川沿いに恵日山（えびやま）と呼ばれる小高い丘陵が存在する。『信長公記』にいう「小高き山」とは、恵日山のことと見てまちがいない。

信長は、窮地に立たされた加治田の佐藤を救援するという名目で、岸勘解由が待ち構える堂洞城へと進軍し、旧暦 9 月 28 日に合戦が幕を開ける。信長は、堂洞城の周りを駆け回り、「松明を投げ入れよ」と指示を出す。その指示により、松明が投げ入れられ、二の丸は焼かれた。そのとき、丹羽長秀・河尻秀隆が攻め込み、城の中は敵も味方も分からないほどの激戦だったと言われている。岸勘解由ら大将分はほぼすべて討ち取られたとあり、江戸期の軍記物（『堂洞軍記』）では、息子の岸孫四郎が討ち死にとの知らせを受け、岸勘解由と妻が、これまでと悟り自害したとされる。

堂洞合戦は、およそ正午には始まり夕方 6 時ごろに決着した。翌日に岸勘解由の首実検を済ませ尾張へ帰陣する際に、信長一行は、長井隼人と斎藤龍興の軍勢に急襲されるが、これをかわして尾張へ退陣する。さらに、長井・斎藤の軍勢は加治田へ攻め寄せ、加治田城下の西にある絹丸にて合戦となり、佐藤右近右衛門が討ち死する。合戦は、信長の家臣斎藤新五（斎藤道三の子息のひとり）が加勢したことで、加治田勢が長井隼人・斎藤竜興の軍勢を退けたとされる。堂洞城を落とした信長は、その勢いで関を自分のものにして、2 年後の永禄 10 年（1567 年）には、稲葉山城（岐阜城）を落とし、美濃一国を平定して天下人への階段を駆け上る。この東美濃攻略戦が、成功していなければ織田信長のその後は変わっていたかもしれない。戦国史にとっても非常に重要な合戦だったといえる。

## 関連史跡の概要

<加治田城> 築城年は不明だが、永禄 8（1565）年には存在したとされている。東美濃攻略戦において、最もカギとなる城である。現在では、戦の場で最も重要となる虎口の作りや、敵の侵入の妨げとして堅堀が工夫されていることなど、戦に関わる多くの遺構が残されている。また、信長が存在していた頃にはなかったであろう、謎めいている石積も残されていることも分かっている。他にも、戦に敵した地にするための細かな工夫がいろいろなところに施されており、実際目で見ると、このころの人の知恵がたくさん詰まっていることが感じられる場であると感じた。敵の行動をよんでいるような、細かいけど重要な作りがたくさん施されている。写真や図ではわからない細かな構造がたくさんあるため、この場はぜひこの地についてよく知っている方と行って構造を目で堪能してほしいと思う。

この城の城主は、佐藤紀伊守、佐藤右近右衛門、斎藤新五と移り変わった。

<堂洞城> 築城年は永禄 8（1565）年頃で、富加町夕田と美濃加茂市蜂屋の境にある。堂洞城は長井隼人が信長に味方した加治田を牽制するために斎藤氏によって築かれた。しかし、信長の東美濃攻略戦の堂洞合戦によって落城し、以後使用されることはなかったと考えられる。

山頂部の主郭は切岸で囲まれている。南側尾根続きには堀切・曲輪・土橋のような箇所がみられる。ただ、現在の堂洞城跡は加治田城跡とは違い、土塁などの防禦施設が無く、主郭部出入口部分の防禦施設である虎口も認められていない。そのため、山城として複雑な構造を持っていないと思われる。眺望も加治田城側に開けられており、加治田城を見張り、攻撃の起点とするために付城として、臨時に築城されたことが起因すると考えられる。『信長公記』によれば、天主構・二の丸があり、堀や二の丸入口の表に「高き塚」があっ

たと記されている。近年堂洞城跡では焼米(炭化米)が出土した。この焼米は堂洞合戦で兵糧が焼けたものだと伝わっている。主な城主は、岸勘解由であった。

**<夕田茶臼山古墳>** 3世紀中頃に築かれた初期の前方後円墳と考えられている。もちろん誰の古墳なのかは不明ではあるが、この地域が初期ヤマト政権と深く関わった考古学的証拠と考えてよい。

夕田茶臼山古墳は、堂洞城との直線距離、約430mという近距離に位置している。天理参考館所蔵の『信長記』には、信長自ら堂洞城の近くにある「高き塚」に本陣を構えたとあり、「高き塚」と呼ぶにふさわしい地形を周囲で探すと、夕田茶臼山古墳においてほかに候補は考えられない。信長は、「高き塚」に本陣を構え、この地から堂洞城を監視した。このことから、織田信長は最前線で指揮を執り、戦をすることを好んだと考えることができ、織田信長の強い意志が感じられる場であると思った。

全国的に見て、前方後円墳に茶臼山という名称が与えられるケースは多い。茶臼とは葉茶をひいて抹茶にする道具で、そのかたちは前方後円墳の平面形に似る。各地に残る茶臼山の名称は、身近な道具に由来すると考えられるが、一方、戦国武将が縁起を担いで戦場近くの見晴らしのよい山を茶臼山と命名したとの説もある。地名由来についてはまだまだ調べなければならない。

**<関城>** 現在の安桜山にあったとされ、築城時期は複数の説があり、その中でも有力なのが永禄8(1565)年に織田信長が東美濃を攻めた際、長井隼人が関に本陣を置いたとの記録があるため、16世紀中ごろには何らかの防衛施設が築かれていたとする説である。また、1528年に築城されたのではとも言われている。安桜山の縄張図を見るとわかるが、常に多数の人員が生活できる住居が建造されていた形跡はない。それは、この場所の地形から住居を建てる広さがなく、平地が狭いからだと言える。この地では、傾斜が緩やかになっている北側に曲輪がいくつか作られ、傾斜の急な南側は敵がそこから攻めてくることはないと考えられたのか、何も遺構が発見されていない。まだ、この地は遺構をもとに年代やここで起こったことの推定がされている最中である。

### **<織田信長の東美濃攻略戦とまちづくり 私たちが提案すること>**

織田信長の東美濃攻略戦はこの地域にとって誇れる歴史であり、もっとたくさんの方々にPRすべき事実だと私たちは考える。

現在、PRとして織田信長の東美濃攻略を歴史マンガに仕上げた『夕雲の城』が製作され(富加町教育委員会)、さらに関市の市役所職員の中島真也さんも、堂洞合戦をテーマに短編小説「堂洞の人質」を執筆し、岐阜県文芸祭グランプリに輝いた。現在、この小説のリライト版が富加町広報誌で連載中である。「夕雲の城」については、フィクションを交えたマンガの部分も読みごたえがあるが、巻末の研究論文に史実に即した記載があり、何が史実でフィクションなのか、初心者でも明瞭にわかる仕組みになっている。地元富加町や美濃加茂市、坂祝町では販売もされているが、地元以外では知名度はまだまだ低い。信長の美濃征服は大河ドラマで必ずと言ってよいほど取り上げられるが、東美濃攻略戦という岐阜県全体の歴史は、地域の人ですら把握できていないところがあると感じている。

その原因として考えられることが二つある。一つ目は、一部の人はこの地域には素晴らしいものがあり、誇らしいと感じて活動しているが、ほかの地域の観光地の人と比べると

アピール力が弱いということである。二つ目に地域の人がこの地をアピールしたい、ここに来てこの地の素晴らしさを知ってほしいという気持ちがまだまだ弱く、この地について深く歴史を掘り、多くの人にアピールするという考え方が希薄であるということが挙げられる。

実際私たちも今までそうだった。この地にこのような歴史があったなんて思いにもよらなかったし、この地域をアピールしたい、ここは素晴らしいと思うことも少なかった。しかし、いったん歴史を紐解いてみると、このような素晴らしい歴史があるのに何も行動しないのは勿体ない。

そこで、私たちは、この織田信長東美濃攻略戦で登場した場所を観光スポットにし、歴史好きの方が集まれるようなツアーや、イベント、プレゼンを行うなど、地域のまちづくりの活性化の一環とした活動を行うことを提案する。この提案のきっかけは、私たちが行ったフィールドワークである。フィールドワークに出かけた時、私たちは信長についても、東美濃攻略戦についても十分な知識がなく、初めて聞くことが多くあったが、東美濃攻略戦のことについてよく知っている専門家の方にお話を聞きながら回ることで、歴史の素晴らしさと歴史についてもっと深く追求したいと感じた。そこから私たちのようにあまり知らなくても興味が持てるきっかけになることから、この提案がこの織田信長東美濃攻略戦のPRにふさわしいものだと考えた。

富加町では、地域の小学生を対象に加治田城の「歴史探検」を実践し、富加町教育委員会の方や地域の有志が、東美濃攻略戦を再現した模擬戦を劇でやるなど、小学生にもわかりやすくかつ楽しく学べるよう工夫をしている。そのアイデアも今後生かして行けるのではないかと思う。実際に、豎掘に沿って山城を登ったり、草木をつかんで切岸を駆け上がったり、虎口や曲輪、堀切の上面から下を見下ろしたりすると、攻め手と守り手の心境が伝わってくるようで、臨場感あふれるツアーになると考える。

本丸あたりは平場になっていて、やろうと思えば寸劇や紙芝居もできるし、専門家によるセミナー、小中高生の研究発表もできると思う。私たち高校生がやれることはいっぱいありそうだし、考えるだけでもワクワクする。こうした活動であれば、それまで歴史に関心の薄かった人たちも、楽しく参加できるのではないだろうか。こうしたイベントを軸に、すそ野を広げていけば、充実した生涯学習のプログラムを構築することが可能だと考える。

以上が、堂洞合戦に関わるイベントやツアーだが、これにとどまらず、地域の特産品やグルメをつなげ、より幅の広いものにしていくことも、創造的で楽しい作業となりそう。実際、加治田城のある加治田の町は、戦国時代には城下町であっただけに、戦国期に創建された臨濟宗寺院、刀鍛冶の工房、二百年も続く酒蔵などが今も残る。少し足を延ばせば、南北朝期にさかのぼる臨濟宗の古刹、正眼寺があって、今も雲水のみなさんが厳しい修行を続けている。他方、正眼寺では一般対象の座禅講座や精進料理も食べられる宿泊コースも組まれている。

私たちの提案は以上だが、これを行うと同時にしなければいけないことがある。それは、広報活動をする事だ。広報にも様々な方法がある。その中で私たちが利用しようと思っているのは SNS である。実際、富加町教育委員会と、地域の有志からなる半布里（はにゅうり）文化遺産活用協議会、そして私たち関高校地域研究部が協力して動画を製作し、地域の文化振興に役立てる事業が始まったところである。第一弾はすでに YouTube にアッ

プされている。

もうひとつ、富加町教育委員会とともに私たちが進めている事業がある。それは今回のコロナ禍で中止となった戦国イベントを実施することだ。期日は令和3年3月28日。場所はタウンホール富加。研究者や地域の方々に交じり、私たちがステージ発表やポスタープレゼンで、地域の歴史遺産の魅力を一般の方々に広く知ってもらおう予定で、今も準備を続けている。私たちの研究は現在進行形である。

#### 参考資料

- ・富加町教育委員会 織田信長の東美濃攻略歴史PRマンガ「夕雲の城」
- ・岐阜県教育委員会 岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第3集（加茂地区・東濃地区）
- ・東洋大学文学部准教授・木下聡先生山城講演会資料 ～信長の美濃侵攻と関城主長井氏～

## 資料1 2019年フィールドワーク（関高SGH情報 第14号）

### ◇ 富加町教育委員会、地域のみなさんで行ったフィールドワーク

日時：令和元年7月7日(日) 8:00～14:00

案内：富加町教育委員会

参加：関高校地域研究部5名、岐阜大学学生1名、関市役所2名

内容：織田信長による中濃攻略戦に関わる山城や古戦場をめぐり、地域の歴史について考える。あわせて、地域の歴史資源の活用について考える。

探訪先：加治田城址、旧加治田城下町、夕田茶臼山古墳(織田信長本陣推定地)、堂洞城址、恵日山(海老山、織田信長本陣推定地)、春日神社、関城址(安桜山)

### ◇ 富加町の歴史を現地で学び、歴史遺産の活用について考える

11 住み続けられる  
まちづくりを



加茂郡富加町は、夕田茶臼山（ゆうだちやうすやま）古墳や半布里（はぶり）戸籍をはじめとする歴史遺産に恵まれた町として知られています。

数ある史跡の中で、私たち地域研究部は、中世山城の加治田城や堂洞城に着目しました。織田信長は美濃攻略にあたって、まずは中濃地域にくさびを打ち込みました（『信長公記』）。加治田城や堂洞城は、信長の中濃攻略作戦の古戦場であり、富加町では遺跡の現状を把握するとともに、教育や観光などの分野における活用を

図っています。

今回、私たちは、富加町教育委員会の島田崇正さん、山内正明さんの案内で、信長による制圧作戦に関わる古戦場をめぐりました。文献史料から遺跡の現状をどう読み解くか。おふたりによれば、信長の時代からすでに450年を経た今日でも、史料の再検討や遺跡の調査により、新たな事実が判明することがあるそうです。今回のフィールドワークは、歴史の証人でもある貴重な文化財を守る意義について、あらためて考える機会となりました。

## ◇ 生徒の感想



■ 今回のフィールドワークで改めて感じたこと、それは、信長はやはり賢い武将だということである。信長は美濃攻略の際、敵の本拠地を初めから攻めるのではなく、あえて東美濃から攻略を開始した。交通の要所である加治田や、日本刀の生産地であり経済活動が盛んな関、これらの地域の重要性を理解していたからだろう。こうした、戦いにおける強さだけでなく、賢さを持ち合わせていた信長だからこそ、有力な戦国大名に成り得たのだと思う。

加治田城主、佐藤紀伊守も同様である。今でこそ、信長は戦国時代随一の大名として知られているが、美濃攻略を始めた当時は、尾張を領するだけの一大名だ。そんな時に、周りを裏切って信長につくという判断を下した佐藤紀伊守。非常に先見の明を持った武将だと言える。

このように、当時の人々が関わった地域や史跡を訪ねることで、その人の考え方まで見えてくるのがとても面白い。これから調べていく明智光秀も、研究をする中で、きっと、今の僕がイメージとは異なることが見えてくるだろう。これからの研究が楽しみだ。



■ 今日のフィールドワークでは、信長が始めに東美濃を攻めた理由がよくわかりました。一方、自分たちの領地を守ろうとした領主の奮闘を、山城に行くことで肌で感じることができました。また、自分の住んでいる土地にも信長が攻めてきて、地元の領主と戦っていたと思うと感動しました。

今回のフィールドワークで、信長ばかりに光があたりがちだけど、領地を守ろうと頑張っていた領主の戦略が肌で感じられたし、自分の住んでいるところにも信長が来ていたと思うと自分の住んでいる土地に誇りがもてました。



[https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019\\_sghjoho\\_14.pdf](https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019_sghjoho_14.pdf)

## 資料2 研究レポートをコンクールで発表（関高SGH情報 第24号より）

### ◇ 地域研究部の生徒2名が、最優秀賞・優秀賞を受賞

日時：令和元年9月7日(土) 場所：瑞穂市総合センター

主催：朝日大学 後援：岐阜県教育委員会 NHK 朝日新聞 岐阜新聞

内容：表彰式 公開講座

### ◇ 受賞作品の研究内容

関高等学校地域研究部では、関市市制70周年イベント（戦国☆甲子園）に備え、関市やその周辺地域の戦国時代の歴史について、フィールドワークや勉強会を行っています。このたびの戦国武将作文コンクールにあたり、部員2名が、富加町におけるフィールドワークの成果をもとに作文を執筆し応募したところ、石原伶緒さん（2年生）と山内康誠さん（1年生）が、それぞれ最優秀賞、優秀賞を受賞しました。石原さんの「東美濃攻略から見る織田信長」、山内さんの「織田信長、語られない天下布武の第一歩」とともに、フィールドワークの知見や読書の知識を生かした作文で、オリジナリティにあふれたものでした。

午前中の表彰式に続き、午後の部では、本郷和人氏（東京大学教授）から「明智光秀を学ぶ」、巽昌子氏（東京大学特任研究員）から「古文書からみる分国支配」と題した講演がありました。公開ディスカッションでは、本郷氏、巽氏、本校生徒2名を含む高校生が登壇し、織田信長が美濃国を攻略した理由、その足がかりとなった東美濃へのフィールドワークをもとに書かれた受賞作について意見が交わされました。

### ◇ 生徒の感想より

■ 富加町のフィールドワークから考えた信長像についての作文で、朝日大学の戦国武将作文コンクール最優秀賞を受賞した。そして、同大学で行われた表彰式、明智光秀についての公開講座に参加した。

公開講座では、東大史料編纂所の本郷和人先生、巽昌子先生のお話を聞いた。明智光秀について、今まで知らなかったことをたくさん聞くことができた。

また、「信長の考えた天下とは日本のことである。信長は自分の領地を守るためではなく、天下布武、天下統一を成し遂げるために戦っていた」。本郷先生が、このようにおっしゃっていた。僕も同じことを考え、作文にも書いていたので、すごく共感でき、嬉しかった。

2人の先生方がおっしゃっていた、歴史の研究はフィールドワークが大切だということ、先人の意見を踏まえながら自分の考えを積み重ねていくこと、これら2つを忘れず、今後の研究に励んでいきたい。

今回こうして研究したことを文章にすることが、とても楽しかった。理解の助けにもなることだから、これからも研究内容を文章にまとめてみようかと思う。



[https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019\\_sghjoho\\_24.pdf](https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019_sghjoho_24.pdf)

## 資料2 2020年フィールドワーク（関高FRH情報 第70号より）

### ◇ 富加町の文化遺産活用協議会のみなさんと一緒に、文化財をめぐるしました！

日 程： 2020年10月25日（日） 8：30～16：00  
場 所： 富加町内（加治田城、清水寺、龍福寺、堂洞城、夕田茶臼山古墳等）  
参加者： 地域研究部の生徒5名、半布里文化遺産活用協議会の方々11名  
案 内： 島田崇正さん（富加町教育委員会文化財専門官）

### ◇ 当日の様子

富加町には、旧石器時代の恵日山（えびやま）遺跡や中世の山城、寺院や仏像など、多くの文化財があります。そうした貴重な文化遺産をまちづくりに生かそうと活動している半布里（はにゅうり）文化遺産活用協議会のみなさんとともに、一日行程でフィールドワークを行いました。案内役は、昨年度に引き続き、富加町教育委員会文化財専門官の島田崇正さんです。概要は以下の通りです。



#### <加治田城>

郷土資料館駐車場に集合。清水谷川公園から加治田城に登城。加治田城は織田信長による東美濃攻略戦に際し、織田勢に味方した

佐藤一族の城。山の各所には堀切、堅堀、虎口といった中世城郭に多く見られる防備のための遺構が見られた。山頂からは岐阜城はもちろんのこと、名古屋のビル街までが見えた（上写真）。

#### <清水寺本堂>

臨済宗清水寺（きよみずでら）を訪れ、井戸順治さんから説明を受けた。寺伝によると坂上田村麻呂により建立されたという。かつては密教寺院であり、本尊は平安期の木造十一面観世音菩薩坐像である。秘仏であるが特別許可をいただき拝観した（右写真）。定朝様式ではあるが、日本史教科書に登場する通常の寄木造ではなく一木造であった。拝観後は庫裏をお借りして昼食をとる。井戸さんや協議会のみなさんから、お茶やお菓子でもてなしていただいた。



#### <龍福寺>

臨済宗龍福寺（りょうふくじ）を訪れ、佐藤紀伊守肖像画や古文書類を見せていただいた。龍福寺は佐藤氏の菩提寺であり、肖像画のほか、室町期から江戸期にかけての古文書類が保管されている。書状や所領安堵状、位牌、木像などの貴重な文化財が今日まできちんと保管されていることに感銘を受けた（右写真）。

今回、清水寺や龍福寺で、私たちのために貴重な文化財を公開していただけたことに、心より感謝申し上げます。



### <堂洞城・夕田茶臼山古墳>

堂洞城は、織田勢を迎え撃った岸一族の居城である。戦の顛末については、信長の一代記である『信長公記』に詳しい。『信長公記』には、信長自らが「高き塚」にて陣頭指揮をとったと記されているが、島田さんはその「高き塚」を、堂洞城のすぐ近くにある夕田茶臼山古墳のことではないかと推測する（右写真、後円部の墳長頂部に立つ）。この古墳は小高い丘に築かれた全長40mほどの前方後円墳で、3世紀前半に築かれたと考えられている。まさに卑弥呼の活躍した時代に築かれたこの古墳の上に、信長がそうとは知らず陣をしいたと聞き、歴史のめぐりあわせの面白さを感じた。



参加者のみなさんの中には、関高の同窓生や保護者の方もいらっしゃって、歴史の話や学校生活の話、文化財の保護や活用の話など、会話もはずみました。富加町の恵まれた文化遺産をまちづくりにどう生かしたらよいのか。地域研究部も活動の輪に加わり、富加町内の歴史探究やまちづくり提案を進めていく予定です。

今般のコロナ禍で中止のやむなきにいたりましたが、今年の3月21・22日に実施予定であった富加町主催の「夕雲の城フェス」において、本校地域研究部も発表する予定でした。研究者の方々とご一緒できる本格的な戦国シンポジウムであっただけに残念ですが、富加町のみなさんとは、今回のようなつながりを持ちながら今後も継続的に研究を続け、文化財を生かしたまちづくりに参加していく予定です。



[https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/frh/pdf/joho/r02/2020\\_frhjoho\\_70.pdf](https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/frh/pdf/joho/r02/2020_frhjoho_70.pdf)

# 明智光秀の謎の前半生を追う

## 史料とフィールドワークからの検証

藤井大輝 山内康誠 小山政亮

### 1 はじめに ～大河ドラマと常識に疑問の目を向けて～

現在、NHK大河ドラマ「麒麟がくる」の放送に際し、歴史ファンのみならず歴史になじみの薄い人々の間でも、かつてないほど明智光秀が注目されている。

だが、そのような状況下であるにも関わらず、光秀の前世は謎に包まれている。永禄12（1569）年4月14日付『沢房次氏所蔵文書』で光秀は初めて歴史に姿を現した（注1）。光秀に関する一次史料の大半は織田家仕官後のもので、仕官前の史料は信憑性が低く、光秀が生きていた時代からかけ離れた江戸期に書かれたものがほとんどである。そのため、光秀の前半生は、このような不確かな史料をもとに語られているのが実情だ。

はたして光秀の前半生の実態はどうであったのか。私たちは、光秀と関係がある史料や論文を読み、さらに実際に現地に足を運び、フィールドワークを行うなどして研究を進めた。その結果は本論で述べるが、今まで語り継がれてきた光秀像の矛盾点や各々の説の関係性など、今までとはまったく異なった多くの事実を知ることになった。

### 2 明智光秀と土岐明智氏

メディアに出演するほどの著名な歴史研究者でも、光秀は名門である土岐明智氏の出身であると断定している方々が複数いる（注2）。だが、一次史料に即した最新の研究によると、光秀は、仮に土岐明智氏出身であったとしても嫡流ではなく、しかもあまり高い身分でなかった可能性が浮かび上がってきた。

#### （1）土岐明智氏出身説の再検討

光秀を土岐明智氏出身とみなす根拠のひとつは、『立入左京亮入道隆佐記』にある「美濃国住人ときの随分衆也。明智十兵衛尉」との記載である（注3）。だが、木下聡氏は、近年の総括的論文で慎重な見解を發表した。さらに三宅唯美氏の土岐明智氏に関する論考や、（注4）を参照にすると、以下のような光秀像が浮かび上がる。

#### （2）木下聡氏、三宅唯美氏の所説

土岐明智氏は室町幕府では奉公衆・外様衆に属し、明智兵庫頭を名乗る者が代々惣領を務めていた。14～15世紀の土岐明智氏は、土岐一門の中では家格も高く、「ときの随分衆」（土岐一門の有力者）と言われるにふさわしい家柄であった。だが、一次史料である「土岐文書」を読む限り、15世紀以降、在京の本家（頼宣・政宣系）は、在郷の分家（頼尚系）に惣領の地位を篡奪されたと考えられる（注4）。その後、頼尚の子息頼明が兵部大輔に任官された後からは、土岐明智氏の史料上の足取りは判然としなくなる。

従来の説に従えば、土岐明智氏に生まれたはずの光秀だが、実際は、足利義昭の足軽衆に過ぎない。もし光秀が土岐明智氏嫡流出身であれば、従来通りの奉公衆の役職に就くはずだが、実際はそれより格下の足軽衆に列せられている。光秀が土岐明智氏の嫡流ではな

いと考えるのが自然だろう。仮に土岐明智氏出身であったとしても、末端の庶流に過ぎない家柄の出であったと考えておくのが穏当だ。(注5)(注6)。

### 3 明智光秀の誕生伝説を追って

岐阜県内には、光秀の生誕地伝説が大きく分けて4つ存在する。いずれの地も一次史料の「土岐文書」に一切記載がなく、後世作られた系図・軍記の記載やその地域に残る伝説を根拠とするため信憑性に欠けているが、私たちは伝説の真偽や誕生した経緯を確かめるため、二次史料や地域に言い伝えられている伝説をもとに現地フィールドワークを行った。

#### (1)「可児市瀬田長山」説(明智荘)

岐阜県の中南部に位置する可児市瀬田長山は、平安朝より明智荘と呼ばれ、一般的に光秀が生誕し前半生を過ごした場所と考えられている。実際、NHK大河ドラマ「麒麟がくる」でも、可児市瀬田長山を意識した舞台設定がなされた(注7)。その根拠は、『美濃国諸旧記』の「康永元(1342)3月、可児郡明智荘長山に初めて長山城を築城した」「弘治2年(1556)9月、斎藤義龍の攻撃を受け明智光安らが籠城、光秀に明智氏再興を託し自害した」との記載である。だが、私たちは、この説は論拠不十分であり、成り立たないと考ええる。

一つ目の根拠として、前掲の『美濃国諸旧記』は光秀が亡くなってから半世紀以上経過した後に書かれた歴史書であるため、逸話の多くが後世に成り立っている可能性が高い。実際、『美濃国諸旧記』には他にもたくさんの逸話が書かれているが、数々の逸話を裏付けることができる一次史料は現在、存在しない。

二つ目に、長山城で一般的な山城に存在するはずの曲輪や堀切を確認できず、結果、ほとんどが自然地形であることが分かった。もし城があったと仮定しても、そのような城の状態では、『美濃国諸旧記』にあるような3700人もの斎藤義龍の兵を二日間も耐えしのぐことは不可能に近いだろう。現状、長山の丘陵を中世城郭とみなすことはできない。

この二つの理由より、私たちは、可児に残る伝説は、江戸期に創作されたもので、もともと城などは存在せず、光秀が居住していたという根拠もまったくないと考える。

#### (2)「恵那市明知」説

「恵那市明知」説は、史書や文書ではなく、地域住民に伝わる伝説をもとに主張されている。「恵那市明知」説も、「可児市瀬田長山」説と同様に一次史料による立証はまったくできていない。伝説によると、大永6(1526)年、光秀は落合砦で誕生したという。明知という地名と地域内での伝承を根拠に伝説が主張されているが、恵那市明知はその時代、遠山氏の支配下に置かれており、明智氏が遠山氏の領地を支配する余地はまったくないため、私たちは「恵那市明知」説も光秀の死後に作られた伝説であると考ええる。

以上の状況から考えて、「恵那市明知」説は、明智と明知という音通からの誤認、もしくは作為的な伝説とみるべきである。

#### (3)「大垣市上石津町多良」説

多羅城は大垣市上石津多良地区にかつてあったとされる中世の城郭である。光秀は1528年、石津郡多羅で進士信周の次男として生まれた。母は明智家当主光綱の妹であり、子のいない光綱のもとに光秀は養子として渡され、可児明智城で育ったという(注8)。この説

は『明智一族宮城家相伝系図書』や『続群書類従』所収の系図を根拠にしている。だが、光秀が生誕したとされる多羅城の位置は特定されていない。また、「上石津町多良」説は、『明智一族宮城家相伝系図書』に「可児市瀬田長山」説と併記されているに過ぎず、しかも「傳曰」すなわち「このような説も存在するかもしれない」という異説扱いである。そもそも典拠とされる『明智一族宮城家相伝系図書』自体、江戸期に創作された系図であり史料価値は極めて低い。この説も史実とは認めがたい。

#### (4) 「関市洞戸町・山県市中洞」説

山県市中洞には、光秀の墓と伝承されている「桔梗塚」や「産湯の井戸」の伝承地が今も残されている。随筆集の『兵家茶話』（享保年間）や『翁草』（寛政年間）には、光秀について、「山崎の戦いの敗走中に討たれたのは影武者の荒木山城守行信で、光秀は生き延び荒深（荒又）小五郎に名を変え隠れ住んだ。やがて関ヶ原の戦いに東軍に味方しようと戦場に向かう途中、増水した川へ転落し落命した。」と記されている。また、地元の伝承では、「光秀の母は中洞の武士、中洞源左衛門の長女、お佐多である」と言い伝えられている。

さらに地誌『美濃雑事記』（文化年間）には、現在の関市洞戸に類似の伝説があった。洞戸と中洞は隣接地域であり、ふたつの伝説は同根と見てよい。だが、この史料は光秀の死後、1、2世紀後に書かれたものであることや家系図の不自然な点から信憑性に欠けており、後世の人々が創作した話と考えるべきである（注10）（注11）（注12）。

### 4 明智光秀伝説誕生の背景

3章では光秀伝説の真偽を研究した。その結果、どれも史実とは考えにくく、現時点では光秀と美濃を直接結びつける根拠は極めて薄弱と言わざるを得ない。ではなぜ美濃各地に逆臣であるはずの光秀に対し好意的な逸話が伝えられているのか、美濃の人々は江戸時代になってなぜ自分たちと光秀の関係を作ろうと考えたのか、を検証していく。

#### (1) 江戸幕府への不満

前掲の伝説が作成されたのは主に江戸時代である。伝説はいずれも荒唐無稽ではあるが、光秀になにがしかの同情心や愛着を感じる内容である。私たちはこうした伝説の背景に、幕藩体制への不満や光秀への同情・親近感があったのではないかと考えた。江戸時代の一般的な農民の年貢率は40～50%であるうえに時代が進むにつれて水呑み百姓の割合が増加し貧しい生活を送る人が多かった（注13）。私たちは、このような生活困窮を背景にして不満を持ち、体制批判に向かったが、事を荒立てたくない人々が、光秀の悲運を自分たちの境遇と重ね合わせ、たとえ虚構でも自分と関係を持たせて、心の拠り所にしたのではないかと考えた。

#### (2) 明智光秀ゆかりの地

今回の研究では明らかにすることができなかったが、比較的狭い地域に光秀伝説がこれほど多く存在するということは、実際、美濃のどこかに、本当に光秀が生まれた土地があるのかもしれない。であるがゆえに、美濃の人々は郷土出身の武将の悲運の最期を嘆き、光秀伝説を創作したとも考えられる。ただ現状では史料的な限界もあって、光秀の故郷を具体的に特定することはできない。あくまで推測に過ぎないことをお断りしておく。

#### (3) 明智家への共感・同情

戦国時代には下剋上は当たり前であった。織田信長は主君であった織田信友を討滅し、

続いて自ら擁立した尾張守護斯波義銀を追放し、さらには將軍足利義昭も追放した。豊臣秀吉も信長の死後、下剋上で主家織田家を乗っ取った。徳川家康も大阪の陣で主君秀吉の跡継ぎの豊臣秀頼を倒した。客観的に考えれば、光秀のみが逆臣として忌み嫌われなければならない理由はない。おそらくは江戸期の人もそう考えたのではないか。

光秀が美濃出身かどうかはさだかではないが、土岐妻木氏や、家臣団の中に肥田・三宅・可児などの美濃出身と思われる武士たちが江戸期を迎えても、光秀に親近感を感じ、同情心や親近感、体制に対する不満から、このような伝説を創作したのかもしれない。

#### (4) 伝説と臨濟宗との関わり

では誰が伝説を創作したのか。前掲の伝説のような込み入った伝説を創作するうえで欠かせないのが、家系図や歴史の知識である。どの伝説にもそうした知識が活用されており、江戸期の美濃の複数の地で、誰かが伝説を一から作ったり、既存の家系図や伝承を捏造したりしたと考えられるのだが、このようなことは、地方の実情をよく知る知識人階級が関わったと考えるべきである。私たちは、地方における代表的な知識人階級、しかも土岐明智氏や土岐氏と深いかかわり合いがあった人々として、臨濟宗の僧侶たちの存在に注目した。

ひとつ目の注目点は、臨濟宗妙心寺派大本山の妙心寺と光秀の関係である。妙心寺には明智風呂と呼ばれている江戸期の浴室が現存している。妙心寺には、塔頭のひとつ太嶺院の僧・密宗（光秀の叔父）が光秀の菩提を弔うためにこの浴室を建設したという言い伝えがある。江戸封建体制が確立され、光秀が逆臣として忌み嫌われていたにも関わらず、堂々とそのような建物を建築しているということは、臨濟宗と光秀に相当深い関わりがあるとみてよいだろう。

ふたつ目は、臨濟宗寺院の分布である。守護土岐氏や土岐明智氏が積極的に臨濟宗寺院を保護したため、美濃には臨濟宗の寺が数多く存在する。ひとつ目の理由と考え合わせ、光秀に親近感や同情心を寄せていた臨濟宗の僧侶たちが、関連する系図や歴史の知識を調べ上げ、美濃各地における光秀伝説の創作に寄与したのではないかと私たちは想像する。土岐氏や土岐明智氏と関係が深い本山妙心寺には、光秀やその一族に関わる伝承が残されていたようであるし、美濃各地にもなにがしかの伝承が残されていたのかもしれない。そうした伝承に、系図や歴史の知識を加え、新たな光秀伝説を創作する。そんな活動に、各地の臨濟宗寺院の僧侶たちが協力したのではないだろうか。

## 5 結びにかえて

今回の研究では、今まで歴史の常識であった明智家の家系や光秀の生誕場所は、証拠が不十分なうえに矛盾している点が多く存在し、現状、これらを史実とみなすことはできないということが分かった。では、なぜこのような伝説が作成されたのか。それは、確かな史料があるわけではないが、人々の江戸幕府への不満や、光秀や明智氏ゆかりの人々の無念の想いを、系図や歴史に詳しい教養ある人々、おそらくは美濃各地の臨濟宗の僧侶たちが言葉にして、後世に伝えるためであったと推測する。

実証主義的な歴史学の立場から言えば、本論の伝説は無価値なばかりか、誤った歴史を広める有害な存在であるとすら言える。だが、私たちが、フィールドワークを行った場所では、毎年、多くのところで光秀の供養などの儀式やお祭りが行われている。また、地域

のボランティアの方々が、後世や観光客の人々に伝説を伝えるために、必死になって説明したり、パンフレットを配ったりしていた。これは、美濃の人々が光秀を心の拠り所にして、今まで強くたくましく生き抜いてきた証でもあるから、今後も、光秀の供養などの儀式やお祭りを続けていってほしい。

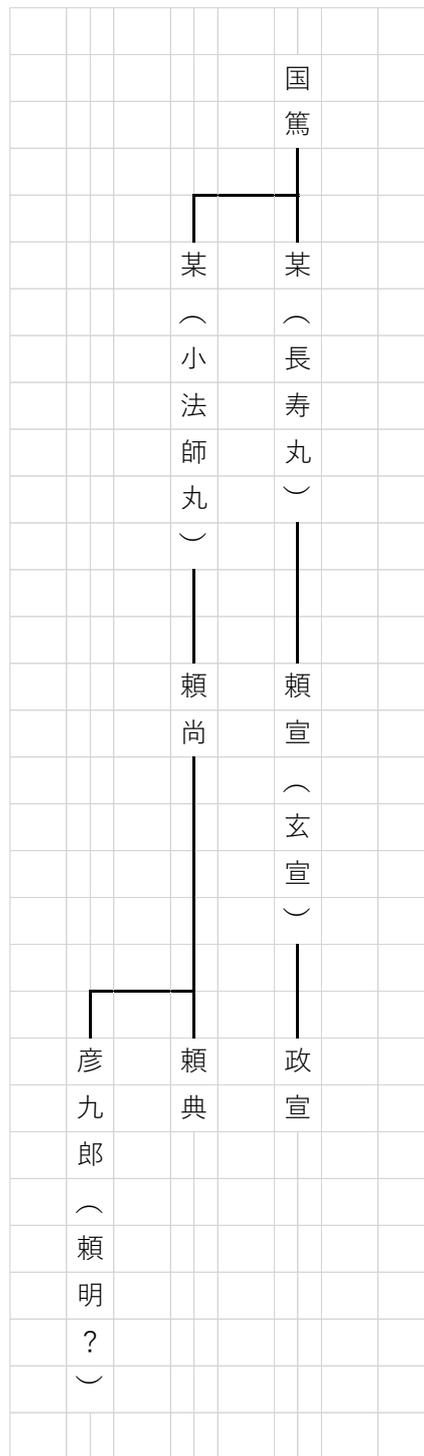
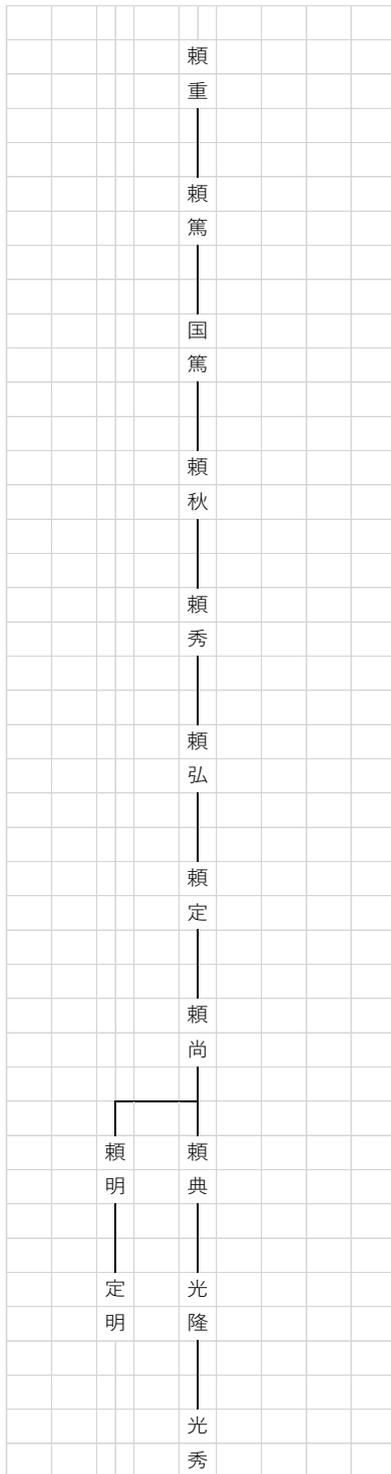
これらが、今回、私たちが導き出した結論である。本当の光秀の出生地や明智家の家系を完璧に明らかにすることができなかったなど、私たちには今後の光秀の研究や地域の人々のためにまだまだやらなければならないことがたくさんある。

最後に、この研究の成果がたくさんの人々の耳に入り私たちにはなかった目線からの研究などが発表され、光秀伝説の研究が発展していくことを強く願っている。また、今回の研究に協力していただいた地域の方々に心よりお礼を申し上げる。

### 【注釈・引用文献】

- (注1) 『沢房次氏所蔵文書』 1569 (永禄 12) 4月 14日付 賀茂荘中宛の連署状
- (注2、3) 『明智光秀 浪人出身の外様大名の実像』 谷口研語 洋泉社 2014
- (注4) 図録『光秀の源流 土岐明智氏と妻木氏』 土岐市美濃陶磁歴史館 2020
- (注5) 『考証 明智光秀』 渡邊大門 東京堂出版 2020 より、第一章「明智光秀は美濃土岐明智氏出身なのか」 木下聡
- (注6) 『織豊大名の研究 8 明智光秀』 柴裕之 戎光祥出版 2019 より、「室町幕府奉公衆土岐明智氏の基礎的整理」 三宅唯美
- (注7) NHK 大河ドラマ「麒麟がくる」
- (注8) 明智光秀生誕の地多賀城 | 大垣・西美濃観光ポータル「水都旅」
- (注9) 『翁草』 神沢貞幹 1776
- (注10) 『稿本 美濃誌』 土岐琴川 宮部書房 1915
- (注11) 『美濃雑事記』 伊東実臣 一信社出版 1816
- (注12) 『兵家茶話』 日夏繁高著 18世紀前半
- (注13) 『詳説日本史 改訂版 日 B309』 笹山晴生 佐藤信 五味文彦 高埜利彦 山川出版社 2016

《土岐文書から作成された土岐明智氏系図》



(左) 土岐氏明智家の系図の中で最もよく知られている『続群書類従』所収「明智系図」(元禄期完成)は「土岐文書」をもとに作成された。頼典の子息・孫として光隆・光秀の名が記されているが、一次史料にはあられもない。意図的な創作の可能性もある。

(右) 在京本家の頼宣(玄宣)の系譜に関する一次史料は、政宣で途絶える。同じく頼典に関する一次史料もない。上野沼田藩所蔵の「土岐文書」も、頼尚が伝領することに矛盾しない文書のみが伝えられたのではないかと見受けられている。

《明智光秀の一生》

1528年	1歳		生誕
空白の時			
1570年	43歳		近江・姉川合戦などで武功を挙げ、出世の道に乗る
1571年	44歳		光秀を中心とし、延暦寺を攻める 坂本城の築城開始 足利義昭との関係を解消
1578年	51歳		娘の玉（後にガラシャ）が細川忠興に嫁入り
1579年	52歳		丹波と丹後の平定が完了
1582年	55歳		本能寺の変を起こす 山崎の合戦で敗死

図のように光秀は織田信長の家臣として活躍するまでは、歴史的に空白の時を過ごしている。今までは美濃にいた、という説が一般的だったが今回の研究で光秀が本論で説明した場所で生活をしていなかったことが分かった。

（注）光秀の出生年もはっきりしておらず、1516年の説もある。

《可児市瀬田長山》

可児市瀬田長山の近くの天龍寺の光秀とその先祖たちの墓。しかし大半は江戸後期の石塔。中には中世墓もあるが銘はない。同所には光秀の位牌があるが後世の作。



可児市瀬田長山にある長山城の本丸周辺である。比較的平らであり建物が建っていた可能性もあるが、比較的狭く、守るには少し心細い場所であった。



長山城から 300 メートルほど離れた場所から、全貌が見渡せる写真である。山自体の標高は 178 メートルと比較的低い。

本丸までの舗装された道からは一般的な山城に存在するはずの曲輪や堀切を発見することができなかった。



光秀の第二の生誕地として伝えられている可児市の「顔戸城」。いまだに堀や瓦、礎石が現存している。また、国指定史跡や続日本 100 名城に指定されている。

#### 《 恵那郡明知 》



光秀産湯の井戸である。光秀伝説がある各地に産湯の井戸が存在するが、恵那郡明知の物はその中でも保存状態が良かった。



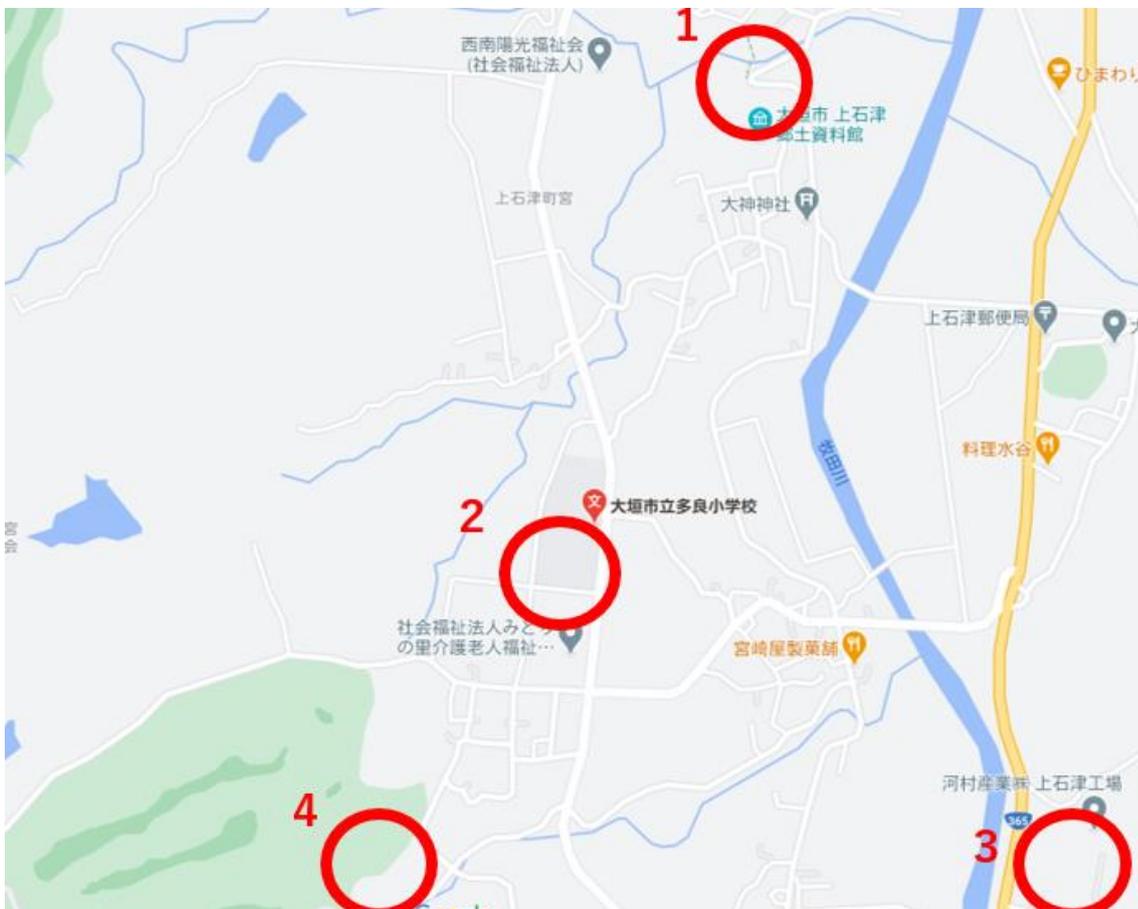
恵那郡明知城には多くの曲輪や堀切を確認することができた。ここを光秀の生誕地として認めることはできないが、この城を所有していたとされている遠山氏が多くの費用や時間を費やして作ったのだろう。



光秀ゆかりの天神神社。明知城付近。光秀が学んだ学問所の跡という。

《大垣市上石津町多良》

大垣市上石津町多良は、伝説である上にまだその伝説でさえもはっきりしていない。



- 1 西高木家陣屋跡 2 羽ヶ原の城ヶ平 3 松ノ木の城山 4 上多良の城屋敷

上の図は伝説の中で光秀の出生の可能性のある場所である。どの場所も一次史料で裏付けることができない。また、この伝説以外にこの地域と光秀に関する記載は皆無に等しく、大垣市上石津町多良を出生地として考えることはできない。

《山県市中洞と関市洞戸》



中洞の光秀産湯の井戸は、現在、井戸の跡はなく 柵で囲われるだけとなっている。



中洞には光秀墓（桔梗塚）があり、現在も地元の人々によって花をお供えするなどの手入れが行われている。

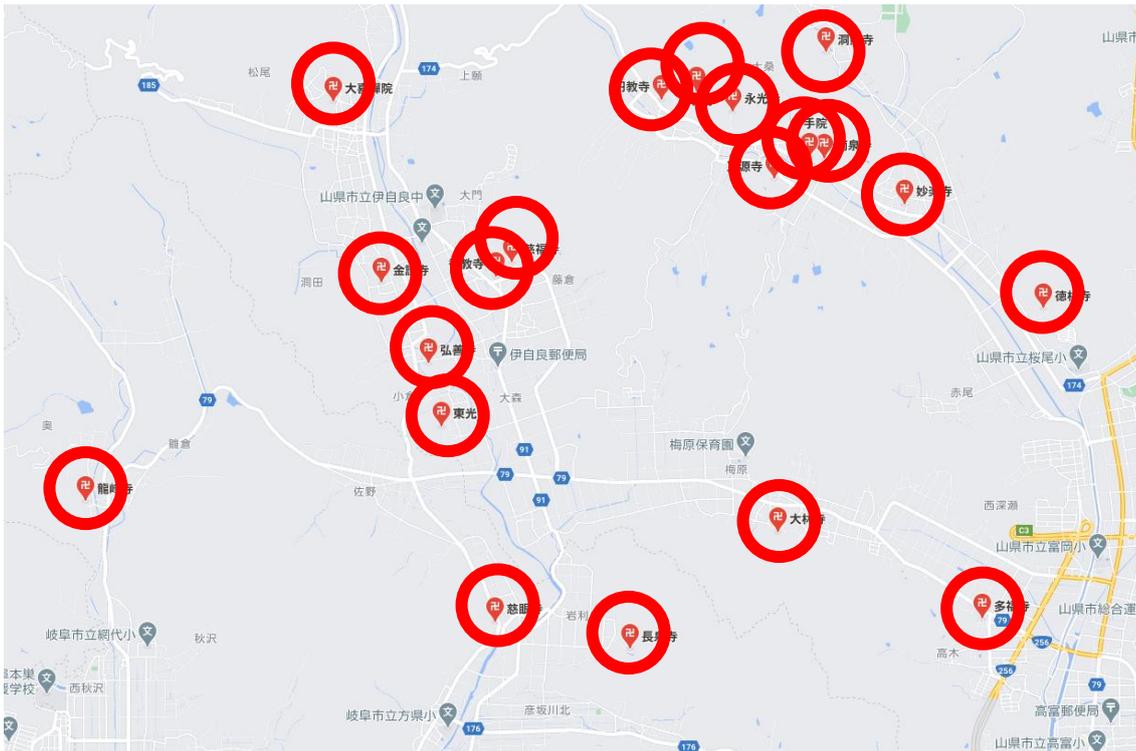


光秀の産湯の井戸と墓がある白山神社。神社の規模としては小さいが、光秀ブームの中、訪れる人も多くなっている。



洞戸の光秀伝説が伝えられている臨済宗妙心寺派の保福寺である。

## 《臨濟宗と岐阜県》



地図は岐阜県の南で臨濟宗の寺が密集している地域である。これほどの狭い地域で臨濟宗の寺が密集している地域は全国的にも稀である。



臨濟宗妙心寺派大本山の妙心寺にある通称、明智風呂である。今から500年前に建築されており当時の技術や費用、風当たりから考えると相当、大変であったと思う。だが、それほど妙心寺は光秀と深い関係にあったのだろう。

# 明智光秀と関市のつながりを追って

藤井大輝 山内康誠 小山政亮

## 1 関市にもあった光秀伝説

現在、NHK大河ドラマ「麒麟が来る」が放送されている。主人公である明智光秀は、織田家仕官以前の一次史料がほとんどなく、その前半生は謎に包まれている。土岐氏の庶流、土岐明智氏の末裔とみなす説（小和田哲男氏）もあるが、確かな史料がないため、慎重論をとる研究者も少なくない（木下聡氏、渡邊大門氏）。

前半生に関する史料は、江戸期の軍記物語や系図、伝承の類ばかりであるが、いずれも美濃出身説であり、恵那市明智、可児市明智、山県市中洞、大垣市上石津の伝説がよく知られている。

私たちは、様々な史料を調べていくうちに、関市にも、隣接する山県市と類似した光秀伝説が伝わっていたことを知った。さらに、江戸期の家系図に、光秀の遠祖にあたる人物が関市の一部を統治していたとの記載があることも知った。

信憑性に欠けると言われる江戸期の伝説の背景には、いったい何があったのか。以下に私たちの探究の軌跡を記す。

## 2 関市洞戸、山県市中洞の光秀伝説

山県市中洞には、「光秀の墓」（桔梗塚、右写真）や「産湯の井戸」の伝承地が今も残されている。

「この地で光秀が生まれたこと」「山崎の合戦後、隠棲していたこと」のふたつが伝説の柱であり、随筆集の『兵家茶話』（日夏繁高著、18世紀前半）や『翁草』（神沢貞幹著、18世紀末）には、光秀について、おおむね以下のようなことが書かれている。



山崎の戦いの敗走中に討たれたのは影武者の荒木山城守行信で、光秀は生き延び荒深小五郎に名を変え、西洞寺の林間に隠れ住んだ。そして雲水となって諸国遍歴の旅に出たが、関ヶ原の戦いに東軍に味方しようと戦場に向かう途中、増水した川へ転落し、落命した。その死骸が桔梗塚に持ち帰られ、埋葬された。

さらに江戸期の地誌、『美濃雑事記』（間宮宗好著、19世紀初頭）は、現在の関市洞戸に類似の伝説があったと伝えている。

明智日向守光秀のひ孫を名乗る不立という人物がいた。彼が言うには、光秀は山崎の戦いに敗れた後、ひそかに洞戸村に隠れていた。関ヶ原の戦いのとき、神君に味方しようと、村人を引き連れて出発しようとしたところ、川で溺れ死んだ。

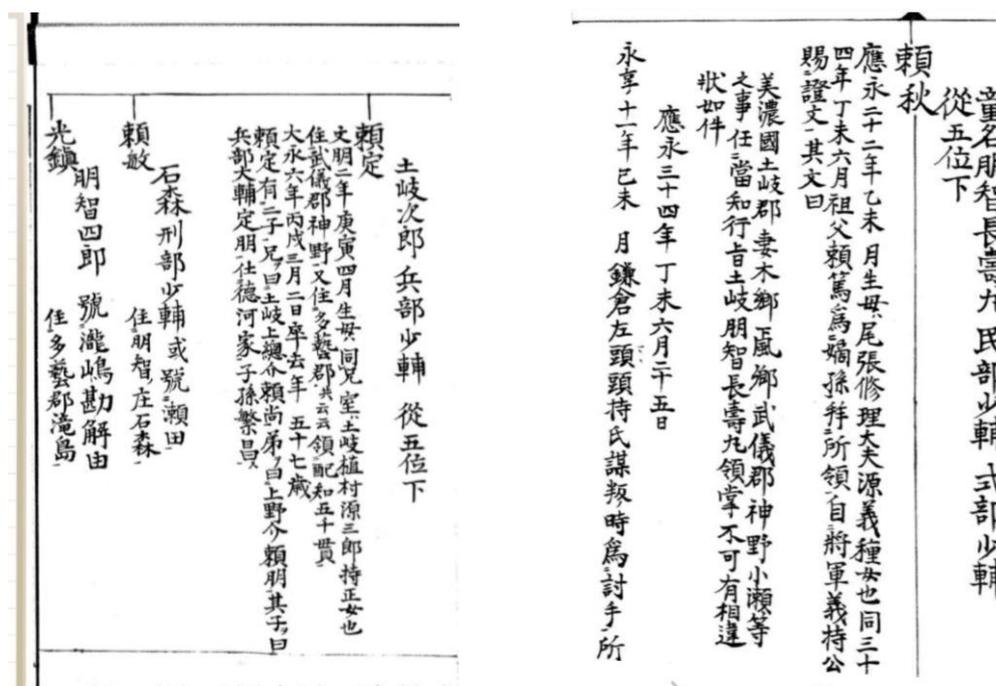
洞戸と中洞は隣接地域であり、ふたつの伝説は同根と見てよい。信憑性に乏しいが、岐阜県各地に「逆臣」であるはずの光秀に対し好意的な逸話が伝えられている点が注目される。

### 3 『明智氏一族宮城家相伝系図書』と関市神野

江戸期に作成された『明智氏一族宮城家相伝系図書』（東京大学資料編纂所蔵）には、「明智頼定が武儀郡神野に住んでいた」「明智頼秋が武儀郡神野・小瀬を支配していた」と書かれている（下写真）。『続群書類従』所収の明智氏系図（元禄期）によれば、頼定・頼秋ともに光秀の遠祖にあたる人物である。

神野を含む関市富野地区には、平安期から中世にかけての史跡が多い。蜂屋荘貝小野、神野荘、志津野荘という3か所の荘園、鎌倉末期に臨済宗の僧・峰翁祖一が建てたとされる大通寺・大禅寺・吉祥寺、中世にさかのぼる上大野神社や小野神社、県下でも最大規模の中世山城・小野山城が残る。また、吉祥寺の寺紋の由来は不明だが、土岐氏や明智氏の使った桔梗紋である。

富野地区は中世の史跡が豊富な地域である。前掲の家系図の信憑性は疑わしいが、富野地区の歴史的背景が、伝説の形成と関わるのではないかと、私たちは考えた。



「明智氏一族宮城家相伝系図書」（東京大学史料編纂所蔵HPより）

<https://clioimg.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/list/idata/200/2075/150/?m=limit>

### 4 一級史料「土岐家文書」の分析から

美濃守護土岐氏の庶流であり将軍家の奉公衆でもあった土岐明智氏（明智氏）は、江戸初期に土岐氏に改姓し譜代大名として存続した（上野沼田藩）。沼田藩に伝わる「土岐家文書」は、足利家からの所領安堵状を中心とした中世文書群の一級史料であ

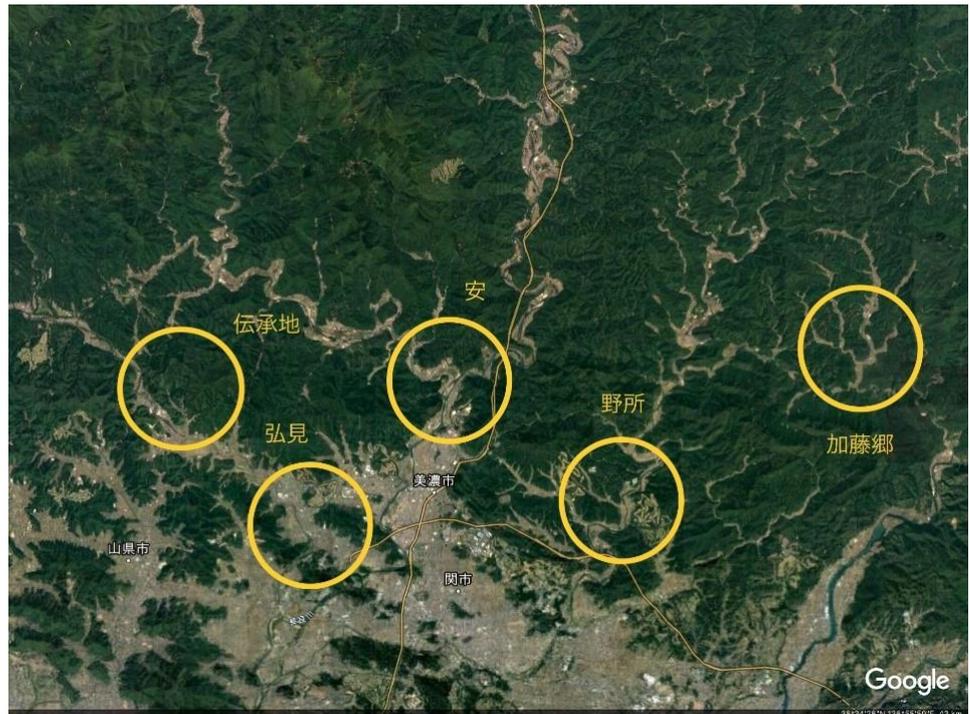
る。土岐家はこの文書をもとに家系図を復元し、幕府に提出している。

「土岐家文書」をもとに作成された『続群書類従』所収の明智氏系図には、光秀と沼田藩祖・定政とが「又従兄弟」の関係となっているし、近年その所在が確認された定政の伝記では従兄弟同士の関係とされている。さらに沼田藩には、光秀が定政に与えたとされる「血吸の槍」も伝えられており、これらを根拠に、光秀を土岐明智氏一族とみなす見解もある。一方で一次史料の裏付けがないことから、慎重論も根強い。

もし光秀が土岐明智氏嫡流に近い人物であれば、足利義昭によって奉公衆に列せられるはずだが、実際は格下の足軽衆に過ぎなかった。土岐家文書と光秀を結びつける一次史料もない。木下聡氏は、現状、光秀を名族土岐明智氏の嫡流に近い人物とみなすことはむずかしいと指摘する。私たちがそのように考える。

## 6 「土岐家文書」に登場する明智氏と関市

「土岐家文書」を読み進めるうちに、土岐明智氏の所領として、武儀（関市とその周辺）の地名があらわれることがわかった。私たちは、関市と土岐明智氏は繋がるべくして繋がったのではないかと考えている。それを紐解いていくためには関市という土地と土岐明智氏について知る必要がある。現在の関市を中心とした当時の武儀郡は、河川交通の要衝であり、物資の一大集散地であった。特産の和紙、そして刀剣をはじめとする鉄製品を求めて多くの人や情報が集まったはずである。当然、河川交通も陸路も整備されたであろう。武儀郡を含む美濃各地には、幕府の直属軍である計画的に奉公衆が配置されていた。都への軍事動員が容易であることや、豊かな経済基盤がその理由として考えられる。



西から加藤（七宗町神淵）、野所（関市神野ほか）、安（美濃市安毛）弘見（関市広見）。伝承地は関市洞戸と山県市中洞。

「土岐家文書」によると、武儀郡を支配していた土岐明智一族は以下の3人である。

- ・ 頼忠（足利義詮より所領安堵）
- ・ 頼重（足利義詮より所領安堵）

・頼高（足利義満より所領安堵）

所領安堵状からは、14世紀半ばから15世紀前半までの80年ほど、土岐明智氏による武儀郡支配が継続していたことがわかる。最初に武儀郡を支配した人物は頼忠であった。土岐明智氏は、足利家内の内乱で武功をあげ、武儀郡などの領地を将軍から与えられ次々に領地を広げていった。

武儀郡以外では、土岐郡（土岐市）、多芸郡（大垣市）を統治していたことが知られている。

15世紀半ばを迎えると、「土岐家文書」から武儀郡の名前が姿を消す。おそらくは幕府の衰退とともに土岐明智氏の勢力も後退し、80年続いた武儀郡の所領支配は終焉を迎えたと考えられる。15世紀後半、中濃地域では守護代斎藤氏の勢力拡大が知られている。その後、中濃地区における土岐明智氏の動向は、有名な可児郡明智も含め一次史料にはまったくあられもない。

## 7 「土岐家文書」の武儀郡地名の考証

土岐文書にあらわれる武儀郡の土岐明智領としては、野所（のどころ）、安（やす）、弘見（ひろみ、もしくは安と弘見をひとつの地名とみなして安弘見=あびろみ）、加藤（かふじ、現在の加茂郡七宗町神淵=かぶち、昭和30年まで武儀郡）があげられる。

弘見（もしくは安弘見）は、平安末の荘園として知られる宇多弘見（うだひろみ）荘のことをさすと考えられる。この荘園は、現在の関市広見から武芸川の一部を含む。普通から、中津川市の安弘見を比定する見解もあるがそもそも武儀郡の地名ではない。

安弘見をひとつの地名とせず、安と弘見を別々の地名と考えるなら、安の候補地のひとつとして、美濃市安毛（あたげ）を想定し得る。安毛は長良川本流と支流の板取川の合流点に位置する集落で、交通の要衝に位置する。

土岐文書の記載以外に、広見と明智氏との関わりを示す史料は見られないが、現在も残る天神神社（弘見天神、室町期の神名帳に記載あり）と松見寺（臨済宗相国寺派、尊氏祖母の建立伝承あり、**右写真**）は、この地が土岐明智領であった時代、すでに存在していたと考えられる（『関高SGH情報 第48号』2019）。



[https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019\\_sghjoho\\_48.pdf](https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019_sghjoho_48.pdf)

野所の候補地としては、我々は、先ほど触れた富野地区一帯を想定している。富野は明治に誕生した新しい地名であるが、地区内各所には、神野・小野・大野・志津野と、野のつく地名がある。このうち志津野・神野・貝小野には摂関家系の荘園が設置されていたし、大野には中世にさかのぼる古社もある。関市弘見と加茂郡神淵の中継点でもあり、野所の候補にふさわしい集落と言える。

「土岐家文書」に記載のあることから、南北朝から室町時代前期にかけて、武儀郡

の一部を土岐明智氏が支配していたことは確実である。その実態は明らかではないが、かつて土岐明智氏の所領であったことと、江戸期の光秀伝説が何らかの結びつきを持つのかどうか。私たちは繋がりがあのではないかと考えている。今後の大きな課題のひとつである。



左は「土岐家文書」の加藤郷に比定される加茂郡七宗町神淵の龍門寺。

右は『美濃雑事記』の光秀伝説の舞台となった関市洞戸の保福寺。

## 7 考察 光秀伝説をつくりあげたのは誰か

光秀は現在でも本能寺の変を起こしたことから「悪役」のイメージが強い人物であるが、江戸時代を迎えると、歌舞伎でも伝説でも、同情され、好印象を持たれる人物として描かれている。民衆の幕府への不満のあらわれか。あるいは郷土出身の人物への哀惜か。おそらくその双方が複雑に絡まって、生国とされる美濃で独特の光秀像が語られるようになったと考えられる。

光秀のような主君に反逆する人物が、なにゆえ心のよりどころになっていったのか。たとえ史実と反していても、光秀と自分たちの関係を後世に残そうとした人々の心境はどのようなものであったのか。興味・関心は尽きない。

史料的价值は低いとはいえ、家系図や伝説を「捏造」するためには、歴史に関する教養が必要である。軍記物語だけではなく、「土岐家文書」のような一級史料、諸大名家系図の知識も知り得た人物のはずである。時空を超えて、江戸期の美濃と戦国の光秀、さらには室町期の土岐明智氏を強引に結びつけたのはいったいどんな人物だったのだろう。今後はその謎解きを課題としたい。

関高校地域研究部は、光秀伝説に関する探究活動を関市から県全体に広げ、伝説の真偽やできた経緯、地元の人々の光秀に対する思いなどを聞きながら、今後も精一杯、研究を続けていく予定である（右写真、古文書勉強会の様子）。



### <おもな参考文献>

- ・『岐阜県史通史編 中世』岐阜県1969
- ・小和田哲男『明智光秀・秀満』ミネルヴァ書房2019
- ・渡邊大門編『考証 明智光秀』東京堂出版2020  
(木下聡「明智光秀は美濃土岐明智氏出身なのか」掲載)

## 【特別寄稿】

# ナショナル・アイデンティティとサブナショナル・アイデンティティ

## ウズベキスタンの事例

佐藤 太一

東京大学教養学部国際関係論コース

### 1 はじめに

国家の要件は国民、明確な領域、政府の3つであるというのが一般的な理解である。したがって、新たな国家をつくるためにはこれらを用意しなければならない。3つの要素のうち、国民は誰かというのは自明ではないが、アンダーソンは国民を次のように定義する。すなわち、国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体であり、それは本来的に限定され、かつ主権的なものとして想像される（アンダーソン:2007, 24）。ナショナリズムは国民を想像する営為として解釈される。

ソ連崩壊に伴い、ロシア、ベラルーシ、ウクライナ、モルドバ、ジョージア、アルメニア、アゼルバイジャン、カザフスタン、クルグズスタン、タジキスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、エストニア、ラトヴィア、リトアニアの15の共和国が誕生した。これらの国々も例外なく国家建設のために国民を想像しなければならなかった。その道具として言語、宗教、文化、歴史、神話、文学、英雄など様々なものがシンボルとして用いられる。本稿では、一つの事例としてウズベキスタンがこれらの道具をいかに用いてきたのかを取り上げる。中央アジア地域では、超国家（supra-national）、ナショナル（national）、サブナショナル（sub-national）の3つレベルでのアイデンティティが観察されると指摘されてきたが（Kubicek:1997）、ナショナリズムとはまさに国家レベルのアイデンティティ形成のことである。ウズベキスタンのナショナリズムについては相当の研究の蓄積があるため、第1節で一例としてナショナルのレベルで英雄がどのように利用されてきたのか簡単に紹介する。第2節では、厳密な実証はできないがサブナショナル・アイデンティティとナショナル・アイデンティティの結びつきについて見てみる。最後に、ウズベキスタンの事例を基に、ナショナルレベルだけではなくサブナショナルなレベルのシンボルを顧みることの意義について考えてみたい。

### 2 ウズベキスタンのナショナリズム

高校世界史でもウズベキスタンについて少なからず触れられている。具体的に言えば、現在も残る数々の文化遺跡生み出したティムール朝の繁栄、ウルグ・ベクの天文台を始めとする高度な学問、ロシア帝国進出前のウズベク3ハン国（ヒヴァ・ハン国、ブハラ・ハン国、コーカンド・ハン国）などがそれにあたる。この地域の民族がテュルク系と呼ばれたり、その支配領域が頻繁に変わることから、今日の国民統合

の重要さが窺える。

現代中央アジア諸国の原型ができあがったのは、1924年にソヴィエト政権が民族・共和国境界確定を実現させてからである。これはトルキスタン、ブハラ、ホラズムの3つのソヴィエト共和国を解体し、中央アジア初の民族別の共和国を建設するという大事業であった。その結果、以下カザフ共和国、キルギス共和国、タジク共和国、トルクメン共和国、ウズベク共和国の5カ国が誕生した（小松:2000）。この5カ国はソ連に属しながらも新しい共和国としてのアイデンティティを確立するために新しい民族語をつくりだす一方で、ティムールやチャグタイ語を用いてトルキスタン（上の5カ国）の一体性を主張する「汎トルコ主義」「民族主義」といった考え方も存在していた（小松:2018）。これらは超国家的（supra-national）な思想とみなすことができるが、ソ連としての一体性が失われるとして政府からは危険視されていた。

1991年にウズベキスタンが独立するときにも、前述したように国民統合の必要性に迫られる。そのツールの1つとして用いられたのが英雄、とりわけアミール・ティムールである。帯谷（2005）は、ウズベク人であるという自覚を持たなかったであろうティムールがウズベキスタンの象徴として使われた理由をいくつか指摘している。すなわち、ソ連時代では否定的な評価を受けていた彼を肯定することで抑圧されてきたソ連時代と決別するため、ウズベキスタンがかつてティムールがつくりあげた大帝国を継承したというイメージをつくるためである。

初代大統領イسلام・カリモフもまた国家の英雄として神話化された。ウズベキスタンは権威主義体制（非民主主義体制）であるとみなされるのが一般的で、権力は大統領に集中しているため、その体制を維持するために大統領が自身の神格化を進めるのは容易に想像できる。ところが、彼は2016年にこの世を去ったものの、抑圧的なソ連からの独立、独立後の困難の克服、独立国としての基盤づくり、民主主義的祖国の安定、それを脅かす勢力との戦いを成し遂げたウズベキスタンのリーダーとしてその後も称揚されている（帯谷:2018）。これは、カリモフ政権下で反体制派が弾圧されたり汚職がはびこっていた一方で、経済パフォーマンスなどの点で彼の手腕が完全に否定されたわけではないということ、そして今日でもなおウズベキスタンが英雄を必要としていることの証左であるように思われる。

### 3 サブナショナル・アイデンティティ

サブナショナル・アイデンティティ⇒ナショナル・アイデンティティ？

ウズベキスタンといえば、真っ先に連想されるのはサマルカンド、ヒヴァ、ブハラといったシルクロード上のオアシス都市であるが、本稿では日本ではあまり知られていないウチクドゥク（Учкудук）に光を当ててみたい。

ウチクドゥクはナヴォイ州、砂漠の中心に位置する小さな町である。この町ではウラン鉱石が採掘されていたため閉鎖されており、無名の町であった。ところが、1970年～80年代にソ連で人気を博していたロックバンドのヤッラ（Ялла）が1980年代初頭に「3つの泉（три колодца）」を発表してからその名はソ連全土に知れ渡ることとなった。実際の所、ウチクドゥクが実在している都市だとはあまり知られていないようであるが、このような小さな町がソ連時代、あるいは現在もナショナルなアイデン

ティティ形成に貢献しているのだとしたら興味深い。東洋のエキゾチックなフォークソングの要素を取り入れた彼らの曲が受け入れられたことを中央アジアの人々は誇りに思っていたらう。今もなお彼らの曲がウズベキスタン国内外で愛されているということは、YouTubeのコメント欄から容易に分かる。少なくともヤッラ自体はナショナルなアイデンティティの1つだと言えるだろう（Nurdavletova:2019）。以下に、1コーラスの和訳を付すが、どこことなく日本人がイメージする中央アジアと一致しているようにも感じる。

太陽は今も燃えて砂を焦がしている  
唇は乾ききっている 水の一口でもあったなら  
熱い砂漠に足跡は見えない  
教えてくれ、キャラバンよ いったいどこに水があるのか

ウチクドゥク、3つの泉  
我々を太陽から守ってくれ  
砂漠の救世主よ ウチクドゥク

ナショナル・アイデンティティ⇒サブナショナル・アイデンティティ

一方、国家がサブナショナル・アイデンティティに関与することも考えられる。

2011年に成立した「地理的構造物の名称についての法律（Закон Республики Узбекистана о Наименованиях географических объектов）」第4条は地理的構造物（行政単位、通り、広場、駅、空港名、川、湖など）の名称の要件について定める。この法律では、ウズベキスタンの歴史に深い足跡を残した人物を除き、原則として道路、通り、広場、公園などに個人名をつけることを禁止している（傍点筆者）。これは、国家がサブナショナル・アイデンティティをコントロールしようとする態度を示していると思われる。尤も人物名が公共施設や行政単位に付されるのはウズベキスタンに特有ではない。

ウズベキスタンに歴史に深い足跡を残した人物とは、第2節で触れたような英雄を指す。カリモフやティムールの名を冠する通りは国中に存在するし、空の玄関口である首都の空港の名称はイスラム・カリモフ・タシュケント国際空港である。

#### 4 おわりに

本稿はナショナリズムとサブナショナルなアイデンティティの関係について、ウズベキスタンを事例として考えた。国民統合のためにナショナル・アイデンティティとサブナショナル・アイデンティティが利用されてきたことが確認できた。ただし、いずれもウズベキスタンに特有の現象ではない。

ウズベキスタンと日本は歩んできた歴史、政治体制、文化等あらゆる点で異なっており両者を比較することには意味がない。ただし、両者に共通してサブナショナルなアイデンティティがわれわれという意識を形成するという点でナショナル・アイデンティティ同様に重要であると言えるのではないか。思えば、私たちは斎藤道三や織田

信長、明智光秀を岐阜にゆかりのある人物として誇りに思う一方、彼らは日本全国で英雄として讃えられるという側面も持ち合わせる。サブナショナル・アイデンティティという概念こそあまりなじみがないものの、郷土愛、地元愛と言い換えることができるし、日本の場合、その精神は教育基本法第2条で定められた教育の目標の1つである「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」という規定にも反映されている。そして、伝統や文化とは一体何なのかを追究することが地域研究の使命ではないだろうか。

## 参考文献

- Anderson, B. (1991). *Imagined communities: Reflections on the origin and spread of nationalism*. Revised Edition. Verso books.
- Kubicek, P. (1997). Regionalism, nationalism, and realpolitik in Central Asia. *Europe-Asia Studies*, 49(4), 637-655.
- Kurzman, C. (1999). Uzbekistan: The invention of nationalism in an invented nation. *Critique: Journal for Critical Studies of the Middle East*, 8(15), 77-98.
- Nurdavletova, S. M. (2019). The mechanism of cultural globalization impact on Central Asian states. *Central Asian Journal of Social Sciences and Humanities*, 3(1-2), 100-105.

アンダーソン,ベネディクト (白石隆・白石さや訳) 『想像の共同体:ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山、2007年。

宇山智彦「ユーラシア多民族帝国としてのロシア・ソ連」宇山智彦・松戸清裕・浅岡善治・池田嘉郎・中嶋毅・松井康浩編『ロシア革命とソ連の世紀5:越境する革命と民族』岩波書店、1-34頁。

帯谷知可「英雄の復活:現代ウズベキスタン・ナショナリズムのなかのティムール」酒井啓子・臼杵陽編『イスラーム地域の国家とナショナリズム』東京大学出版会、2005年、185-212頁。

帯谷知可「建国とナショナリズムの神話」帯谷知可編『ウズベキスタンを知るための60章』明石書店、2018年、290-293頁。

小久保亜早子「ローカル・プライドとナショナル・プライドの緊張関係:北海道の心臓移植を例に」『次世代論集』第3巻、2018年、3-29頁。

小松久男編『中央ユーラシア史』山川出版社、2000年。

小松久男『近代中央アジアの群像:革命の世代の奇跡』山川出版社、2018年。

塩川伸明『民族とネイション』岩波書店、2008年。

塩川伸明『ナショナリズムの受け止め方:言語・エスニシティ・ネイション』三元社、2015年。

東島雅昌「政治体制と政治制度:権威主義体制の制度と統治の多様性」宇山智彦・樋渡雅人編『現代中央アジア:政治・経済・社会』日本評論社、2018年、31-56頁。

\*文中のリンクはすべて2020年6月23日時点で有効。

\*\*\*\*\*

私たちはすでに、岐阜といえば、関といえば、というシンボルを持っています。しかし、地元の歴史や人物について研究と再発見を積み重ねてサブナショナルなアイデンティティとは何かを考えて人々を惹き付けることには意義があると思います。地域研究とは政治学、歴史学、経済学などさまざまな分野を横断する学際的なアプローチによりその地域特有の個性を見出すこととされますが、地域研究部が今後も地域を再発見していくことを期待します。

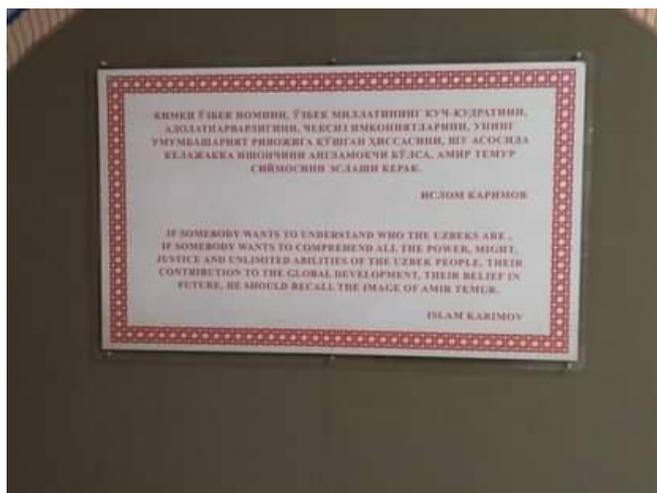


図1 イスラム・カリモフ初代大統領のことば（タシュケント, 2019）  
上段はキリル文字で書かれているがロシア語ではなくウズベク語である。



図2 イスラム・カリモフ前大統領（サマルカンド, 2019）

## 後 記

『岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第4号』は、「歴史遺産とまちづくり」の特集号である。日頃より地域研究部では、自治体や地域の方々と協働した研究活動や、研究成果の普及に関わる活動を心がけている。

通常の一部活動の枠にとどまることなく、学校全体で取り組んでいるSGH事業（2014～）、本年度より新たに始まったFRH事業（2020～）とも連動した取り組みであり、コロナ禍によって様々な制約を受けたものの、各種コンクールや市立図書館イベントなどにおいて、一定の成果をあげることができた。

### （1）関鍛冶を世界へ！プロジェクト 探究活動の成果を生かしたまちづくりの構想

中世から連綿と続く関鍛冶の技。関鍛冶にはじまるモノづくりの伝統。「職人の技と魂こそ関の原点」と考え、今日のまちづくりに生かす方策を論じた論考である。本稿は、全国高等学校郷土研究発表大会（高文連地域研究部門主催）の公共・政策部門において最優秀賞を受賞した。

本研究は、事業者と非営利団体とが協力してビジネスと社会貢献の両立をめざす「せきの未来・社会貢献プロジェクト」（関市商工課管轄）の一環として実施した。

### （2）応永年間、関鍛冶に何が起きたのか 関鍛冶成立期に関する探究

既存の文献史料や考古学資料の再検討に加え、職人への聞き取り調査を行い、関鍛冶成立期についての考察を深めた論考である。本稿は、全国高校生歴史フォーラム（奈良大学・奈良県主催）において優秀賞を受賞した。

### （3）「織田信長の東美濃攻略戦」とまちづくり

織田信長による東美濃攻略戦は、現在の各務原市、坂祝町、美濃加茂市、富加町、関市を舞台に戦われた。古戦場となった犬山城、伊木山城、猿啄城、堂洞城、加治田城、関城は、四百数十年の歳月を越えて今もその威容をとどめている。

本研究では、地域に残る文化遺産をいかに活用し、まちづくりに生かすかをテーマにその方策を論じた。研究成果の一端は、みのかも定住自立圏主催の歴史イベントや、日本考古学協会高校生ポスターセッションでの発表を予定している。

本稿は、全国高校生歴史文化フォーラム（徳島県主催）において入賞を果たした。

### （4）明智光秀の謎の前半生を追う 史料とフィールドワークからの検証

本研究は、関市企画広報課からの研究依頼を受けて始まった。NHK大河ドラマ「麒麟がくる！」の放映を機に、関市にも観光客を誘致できないかとの行政側からのアイデア募集が発端である。県内には、大垣市、山県市、可児市、恵那市など、「光秀の故郷」に名乗りを挙げている自治体が複数ある。本研究では、光秀生誕のまつわる伝承の学術的検証を試みた。研究成果は、全国高校生歴史文化フォーラム（徳島県主催）において佳作を受賞した。

### (5) 明智光秀と関市のつながりを追って

関市から光秀研究の依頼を受け、史料調査やフィールドワークを開始したところ、関市内洞戸に、光秀生誕・隠遁伝説が残されていたことを知った。学術的検証に耐え得る内容ではなく、あくまで口碑・俚伝の類ではあるが、本研究では、伝説の形成過程についての分析・考察を行った。

研究成果は、全国高等学校郷土研究発表大会（高文連地域研究部門主催）のポスター部門において最優秀賞を受賞した。

### (6) ナショナル・アイデンティティとサブナショナル・アイデンティティ ～ウズベキスタンの事例～

本校卒業生で地域研究部部員であった佐藤太一さんの寄稿文である。佐藤さんは、東京大学教養学部国際関係論コースに学ぶ学生で、学部1年の頃より中央アジアに強い関心を抱き、幾度かの渡航を重ね研究を続けている。本稿では、その学びの成果の一端を、後輩たちに語っていただいた。

「地域研究とは政治学、歴史学、経済学などさまざまな分野を横断する学際的なアプローチによりその地域特有の個性を見出すこととされますが、地域研究部が今後も地域を再発見していくことを期待します。」

佐藤さんからいただいた言葉の持つ意味をよく考え、今後の活動に生かしたい。

## 岐阜県立関高等学校地域研究部報告

第4号

発行：令和3年3月16日

発行所：岐阜県立関高等学校

岐阜県関市桜ヶ丘2-1-1

電話 0575-22-5688

FAX 0575-23-7089

岐阜県立関高等学校地域研究部